高松市内遺跡発掘調査概報

－平成２３年度国庫補助事業－

２０１２年３月

高松市教育委員会

例　言

1　本書は，高松市教育委員会が平成23年度に国庫補助事業として実施した高松市内遺跡発掘調査事業の概要報告書である。
2　本書には平成23年度事業のうち，高松市内遺跡発掘調査事業として平成23年４月から11月にかけて実施した試掘調査および内容確認調査を13件，印刷時期の関係により昨年度概報に収録できなった平成23年１月から３月の試掘調査および内容確認調査を６件，平成22年度史跡天然記念物屋島基礎調査事業（屋嶋城跡）の内容確認調査について収録した。なお，平成23年12月分は，本概報印刷時期の都合上，来年度概報に掲載する予定である。
3　調査は，高松市教育委員会教育部文化財課　文化財専門員　山元敏裕・小川賢・渡邊誠・高上拓・波多野篤・舩築紀子，同文化財調査担当職員　池見渉，同非常勤嘱託職員　中西克也が担当した。
4　本書の執筆は山元，小川，渡邊，高上，波多野，舩築，池見が行い，編集は池見が行った。
5　調査の実施にあたっては，次の機関および方々の御指導・御協力を得た。（敬称略，順不同）文化庁，四国森林管理局，香川県教育委員会，有賀祐史，壱岐一哉，川部浩司，大久保徹也・浅海美貴・浅海瑛里香・中野実香・三瀬はづ希・望月広幸・山中聖也・渡邉友佳（以上，徳島文理大学），森下英治・小野秀幸（以上，香川県教育委員会），向井敏伸
6　本書の挿図として，高松市都市計画図２千５百分の１，２万５千分の１を一部改変して使用した。前者は縮尺を５千分の１に改変し，使用している。
7　発掘調査で得られたすべての資料は，高松市教育委員会で保管している。
8　本報告書の高度値は海抜高を表し，G.Nが座標北，M.Nが磁北を表す。

目　次

第１章　高松市内遺跡発掘調査事業（平成23年１月～12月）
特別史跡讃岐国分寺跡－第40次調査－（下水管敷設）……2
神内城跡（確認調査）……4
船岡山古墳－第６次・７次調査－（確認調査）……6
佐料遺跡（福祉施設建設）……7
香川町浅野地区（管理棟新築）……10
国分寺町新居地区（高松西部地域文化施設（周辺道路）建設）……11
多肥上町宮尻地区（集合住宅建設）……11
史跡讃岐国分尼寺跡－第11次調査－（確認調査）……12
通り谷遺跡（墓園区画造成）……19
相作馬塚（農地整備）……20
御殿貯水池南遺跡（都市計画道路木太鬼無線建設）……34
塚（農地整備）……34
新名氏屋敷跡（宅地造成）……35
出作町東原地区（校舎改築工事）……35
西地遺跡（小・中学校建設）……36
上林町本村地区（分譲住宅建設）……38
木太町本村地区（木太南放課後児童クラブ新築）……38
日暮・松林遺跡（福祉施設（老人ホーム）建設）……39
特別史跡讃岐国分寺跡－第41次調査－（住宅新築）……40

第２章　平成22年度史跡天然記念物屋島基礎調査事
史跡天然記念物屋島－屋嶋城跡 浦生地区－……42

特別史跡讃岐国分寺跡
～第40次調査～

1　所在地　高松市国分寺町国分
2　調査期間　平成23年1月11日～14日
3　調査担当者　渡邊　誠，小川賢
4　調査の原因　下水管敷設
5　調査の概要
a　これまでの経緯と調査目的

今回の調査は，史跡地内における下水道管敷設に伴う事前の確認調査である。調査地は東面回廊跡が想定される範囲に位置しており，現状変更の可否の検討および協議を行うための基礎資料を得ることを目的に実施した。

b　調査成果（第17・18図）

① 基本層序

4箇所でトレンチの掘削を行った結果，各トレンチで大きく堆積状況が異なっていたが，各トレンチに共通して，中近世（特に近世）の大規模な整地等によって，古代の遺構面は削平されていた。第1トレンチでは，造成が何度も行われた状況が確認できた。第1層は現代の造成で，第2トレンチとの対応関係から昭和30年以後である。第2～5層がそれ以前の整地に伴うもので，その上面が第1遺構面，第7～9・11層の上面が第2遺構面，第10・12・13層の上面が第3遺構面で，第14層が地山である。いずれの整地層もしまりが弱く，黒ずんだ状況であった。第2トレンチは第1層が表土層で，昭和30年製の一円玉が出土したことにより，それ以後のものと考えられる。第2層は整地層で，その上面が第1トレンチの第1遺構面と対応する。第3層は第1トレンチ第12・13層に対応する。第3トレンチは第1～3層が表土で現代の整地層である。住職の御教示によれば約20年前のもので，昭和60年前後と考えられる。その直下の第4層は浅黄色砂礫土で，しまりが弱く，現代の整地層に含まれると考えられる。第5層の上面が第1遺構面に当たり，柱穴や非常に小規模な瓦溜まりを確認した。その第5層を取り除いて検出した第7層は地山である。第4トレンチは第1層が表土層および現代の整地層で，それ以下は褐灰色粘質シルトの堆積層である。地山と考えられる第4層直上では湧水が認められた。

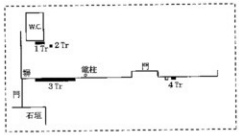
② 遺構／遺物

第1トレンチでは遺構面を3面確認したが，すべての遺構面の構成土（整地層）から，近世瓦や陶磁器が出土しており，近世から近代における造成に伴う整地層と考えられる。第2トレンチも同様である。第3トレンチは第1遺構面において柱穴や小規模な瓦溜まりを確認した。この面は中世以降の整地層でさらに，掘削した結果，地山面を確認した。この地山面で東面回廊の東側の位置で雨落ち溝と考えられる幅1．75ｍの溝状遺構を確認した。回廊南東隅（23次調査）で確認されたような回廊基壇は既に中世以降に削平されていたが，雨落ち溝については確認することができたと考えられる。ただし，遺構の掘削は実施していない。第4トレンチは，表土以下は同一堆積層で，近世の磁器を包含しており，近世以降の整地層である。一方，地山面では湧水が認められた。従ってもともと窪地であった箇所を近世以降に整地を行ったと考えられる。

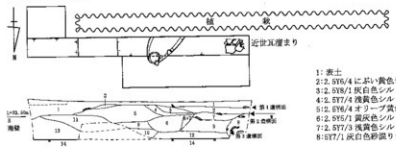
6　まとめ

調査の結果，第3トレンチで東面回廊跡東側の雨落ち溝と考えられる溝状遺構を確認した。それ以外は中近世の大規模な造成が実施されていることが明らかとなった。特に，庫裏の敷地内は近世段階の整地が認められ，高松藩主松平氏による江戸期（寛文・文化年間）の国分寺の再興を示すものと考えられる。（渡邊）

第1図　調査地位置図



【第１トレンチ】

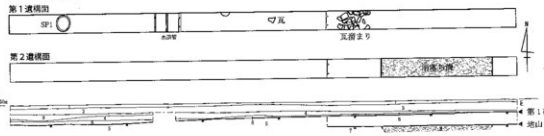


1：表土
2：2．5Y6/4 にぶい黄色シルト
3：2．5Y6/1 灰白色シルト（やや砂質）
4：2．5Y7/4 浅黄色シルト
5：2．5Y6/4 オリーブ黄色シルト
6：2．5Y5/1 黄灰色シルト（やや粘質）
7：2．5Y7/3 浅黄色シルト（やや砂質）
8：5Y7/1 灰白色砂混りシルト（瓦片を多く含む）
9：2．5Y6/1 黄灰色シルト
10：2．5Y7/1 灰白色砂質シルト
11：2．6Y7/4 浅黄色シルト質細砂
12：10YR6/1 褐灰色シルト（赤色粒をまばらに含む）
13：10YR6/1 褐灰色シルト
14：10YR6/6 灰黄褐色シルト質粘土
（マンガン・黒化小礫を含む。固くしまる）

【第２トレンチ】

1：表土（樹木根を含む）
2：2．5Y6/4 にぶい黄色砂礫混りシルト
（炭化物・瓦小片を含む）
3：10YR6/1 褐灰色シルト
（赤色粒・瓦小片をまばらに含む）

【第３トレンチ】

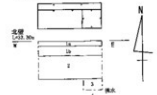


SP1

1：10YR2/1 黒褐色粘質シルト（５層が混じる）

1：表土…20 年前
2：瓦による整地層…20 年前，炭化物混ざる（瓦は古代から現代まで）
3：花崗土（整地）…現代
4：2．5Y7/3 浅黄色砂礫土（造成土）…現代
5：7．5Y3/1 明褐灰色粘質シルト（瓦・礫物を含む）…中世以降の堆積（整地）
6：2．5Y5/2 暗灰黄色粘質シルト
7：7．5Y8/1 明褐灰色粘質シルト（マンガン含む）
8：7．5Y8/4 褐灰色粘質シルト（炭化物・瓦を多量に含む）
7．5Y3/1 褐灰色粘質シルト

【第４トレンチ】



1a：花崗土…現代の整地
1b：角礫　…現代の整地
2：10YR6/1 褐灰色粘質シルト（瓦・礫物をわずかに含む）
3：10YR6/1 褐灰色粘質シルト（褐鉄鉱を少量含む）
4：2．5Y6/1 黄灰色粘質シルト…地山

第２図　各トレンチ平・断面図（Ｓ＝１／60），ＳＰ１断面図（Ｓ＝１／40）

神内城跡（じんないじょうあと）

1　所在地　高松市西植田町
2　調査期間　平成23年２月１日～３月31日
3　調査担当者　小川　賢
4　調査の原因　確認調査
5　調査の概要

第３図 調査地位置図

調査地は春日川の上流，西植田の山間部末端に位置し，中世豪族神内氏の山城跡である。付近に残る地名・地形などから台山と呼ばれる丘陵部を中心に縄張りが想定でき，また城域周辺には神内氏縁の墓所，神社が残るなど中世的景観をよく留める。

台山の山頂部には主郭，従郭の２つの曲輪が認められ，この付近を中心に平成21年度から内容確認調査を実施している。調査開始年度になる21年度は，最高所にあり広い平坦地をもつ主郭について測量およびトレンチ調査を行い，建物跡が想定できる柱穴跡や青磁・白磁ほかの出土遺物が認められた。これにより，調査歴のなかった神内城跡について主郭における遺構面の残存状況など基礎的資料を得た。

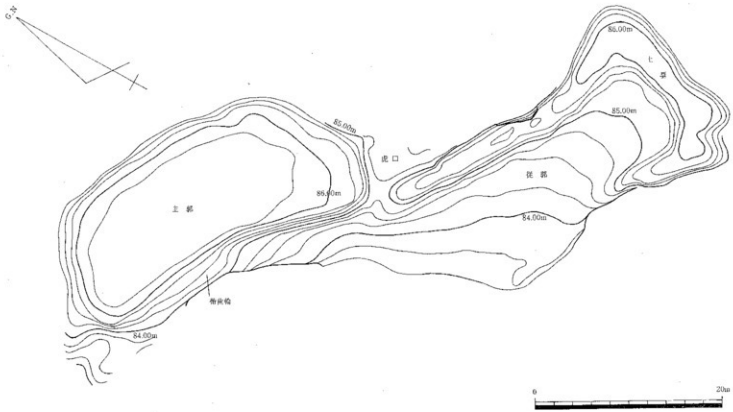
続く本年度の調査では，Ｌ字状に土塁が配される従郭を中心に遺構の把握を困難にしている竹林の伐採と地表に溜まった落ち葉，雑草の除去を行ないながら，測量を実施した。従郭は主郭と同等の広さをもつが，主郭ほど平坦な地形ではなく，1.5m以上の比高差をもって東から西方向へと下っている。主郭から虎口を挟み，土塁が主郭の軸と平行して東西方向へと延びるが，東部は折れ構造を呈する。同時に北東隅において，土塁の幅が広くなることが認められ，当地点が虎口から土塁下方の犬走りに繋がる進入路を見渡せる位置にあることから，隅櫓など遺構の存在も推定される。土塁の南東隅および土塁が切れる曲輪の南斜面についても，竪堀などの防御施設が想定されるが，従郭における遺構確認とあわせて検討が必要である。また主郭の南を囲む帯曲輪の西端では，虎口状の落ち込みを認める。遺構の内容確認とともに，主郭の東西における進入ルートの解明，大手および搦手の検討が課題である。

6　まとめ

今後も，主郭東西の虎口，土塁北東の犬走りおよび堀切など山頂の曲輪に付随して認められる遺構測量を実施し，基礎資料の蓄積を目的とした調査を継続する予定である。

写真１　土塁（西方向から）

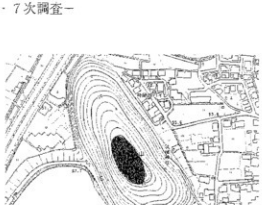
写真２　従郭（西方向から）



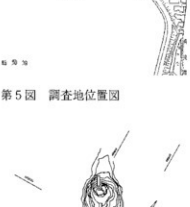
第4図　神内城跡 主郭・従郭測量図（S＝1／400）

ふなおかやまこふん
船岡山古墳 －第６次・７次調査－

１　所　在　地　高松市香川町大野・浅野
２　調査期間　平成23年２月21日～３月４日（６次）
　　平成23年８月15日～26日（７次）
３　調査担当者　高上　拓・舩築紀子
　　徳島文理大学文学部文化財学科
　　大久保徹也 教授
４　調査の原因　重要遺跡確認調査
５　調査の概要　平成20年度より高松市教委と徳島文理大学文化財学科が実施している，船岡山古墳の第６次・７次の確認調査である。高松市教委では，６次調査で１号墳と２号墳の中間地点を，７次調査で前方後円墳である１号墳の東側くびれ部をそれぞれ担当し，調査を実施した。
６　調査成果
７トレンチ南拡張区　内外２段に石列が巡る，１号墳の墳端を検出した１トレンチと，２号墳の南側に設定した７トレンチを連結するように７トレンチを南に拡張し，２号墳の墳端の検出と墳形の確認を目指して設定した調査区である。調査の結果，墳端の区画を確認することはできなかった。また，かつての調査で検出した，墳頂部に広がる石畳状の遺構についても，その延長を確認することはできなかった。
16トレンチ　１号墳の東側くびれ部検出を目指し設定したトレンチである。調査の結果，現地表面下約60cm程度まで厚く土砂の堆積を確認した。掘削を進めると，調査区の墳頂側では地山を整形したと見られる段状の落ち込みを検出し，落ち込みの下方では地山起源の礫，安山岩板石，小円礫が集中して堆積した状況を確認した。検出した礫の種類は，西側くびれ部で検出したものとほぼ同様であり，墳端を形成していた石材の一部である可能性が高い。今回の調査では礫群の上面検出に留め，次回の発掘調査で墳端の残存状況を確認する予定である。
７　まとめ
今回の調査では，墳形が未だ不明である２号墳の南側の墳端の検出を目指したが，墳端を確認することはできなかった。１号墳と２号墳の間の山頂部では，石敷きの遺構を検出しているが，形成の時期や古墳の墳丘構造との対応については，不明である。２号墳の墳形・規模については今後の課題としたい。
東側くびれ部では，安山岩板石と地山礫，円礫の集中を確認したが，西側くびれ部のように明確な墳端を構築したかどうか，今後の調査によって確認する必要がある。前方部東側側面の調査では，墳端の構築がその痕跡すら確認できておらず，もともと構築されていなかった可能性も考えられる。墳丘東側の構造を明らかにする上で今後の調査成果は重要であり，今後も引き続き調査を進めていく予定である。
（高上）



第５図　調査地位置図



第６図　トレンチ配置図
（１／1500）

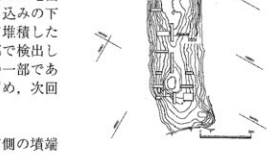


写真３　16トレンチ礫群検出状況

佐料遺跡（さりょういせき）

1　所在地　高松市鬼無町佐料
2　調査期間　平成23年３月22日～23日
3　調査担当者　波多野篤
4　調査の原因　福祉施設建設工事
5　調査の概要

(1)　はじめに

鬼無町佐料で計画された福祉施設の建設予定地は，周知の埋蔵文化財包蔵地である「佐料遺跡」の範囲内であることから，工事に先行して試掘調査を実施した。試掘調査は，一定程度の掘削深度が見込まれる施設本体部分の約880㎡を対象とし，その範囲内に合計４本のトレンチを設定した。

(2)　調査成果

a　基本層序

調査地は，東側にむかって緩やかに下る傾斜地に位置する。基本層序は，各トレンチで細部に違いを見せるもののおおむねⅠ～Ⅳ層に整理できる。Ⅰ層は現代造成土（層厚20～40cm），Ⅱ層は青灰色～灰色砂質粘土（耕作土か，層厚10～30cm），Ⅲ層は黒褐色砂質粘土（遺物包含層，層厚５～20cm），Ⅳ層は黄灰色砂質粘土（河川堆積を起源とする自然堆積層，遺構ベース）である。なお，Ⅳ層以下の堆積状況を確認するため，３トレンチの中央付近で現状地盤から約２ｍの深さまで断ち割り調査を実施した。確認できたのはいずれも河川堆積を起源とする土層と考えられるが，Ⅳ層中にわずかながら遺物が含まれていた。

第７図　調査地位置図

b　遺構の概要

各トレンチにおいて複数の遺構を確認した。内訳はピット２基，溝５条，自然流路２条，性格不明遺構１基である。

１トレンチ北側で東岸を検出したSR01は，検出時から多数の遺物が出土しており完形の土器も含む。SR01に先行する遺構がSD02であり，３トレンチの方向に延びた後，南側に屈曲してトレンチの外側に続く。SD02の南側には遺物を含む自然流路（SR02）が認められる。SR02は，おそらく東西方向の自然流路と考えられるが，流路の南岸については，撹乱のため確認することができなかった。なお，４トレンチでは，SR02南岸を検出していないことから，SR02の南岸は４トレンチの北側に存在する可能性が高いと考えられる。

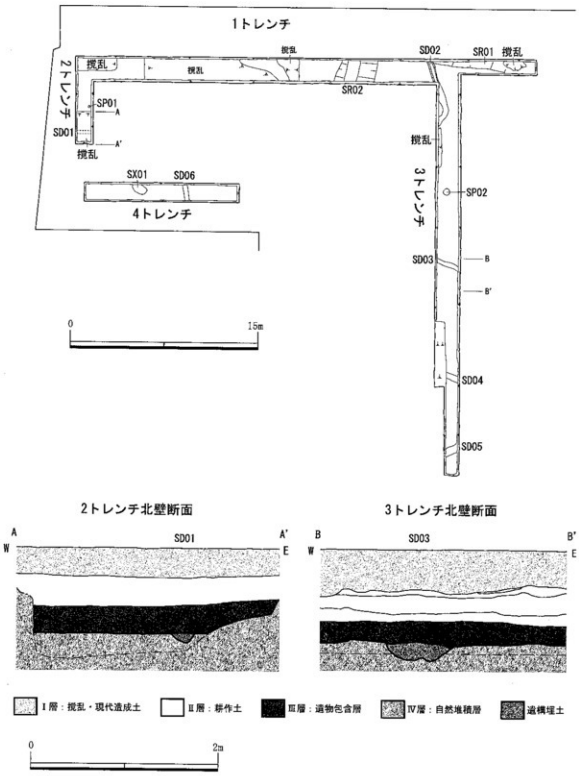
c　出土遺物の概要

遺物包含層および遺構埋土（SP02，SD02・04・05，SR01・02）から，弥生時代後期末～古墳時代前期初頭（下川津Ⅳ式～Ⅵ式）の土器が比較的多く出土している。よって検出した遺構の多くは当該期に属するものであると考えられる。なお，SD02からは石鏃も１点出土しているが，出土遺物の傾向から考えて，混入品と考えられる。

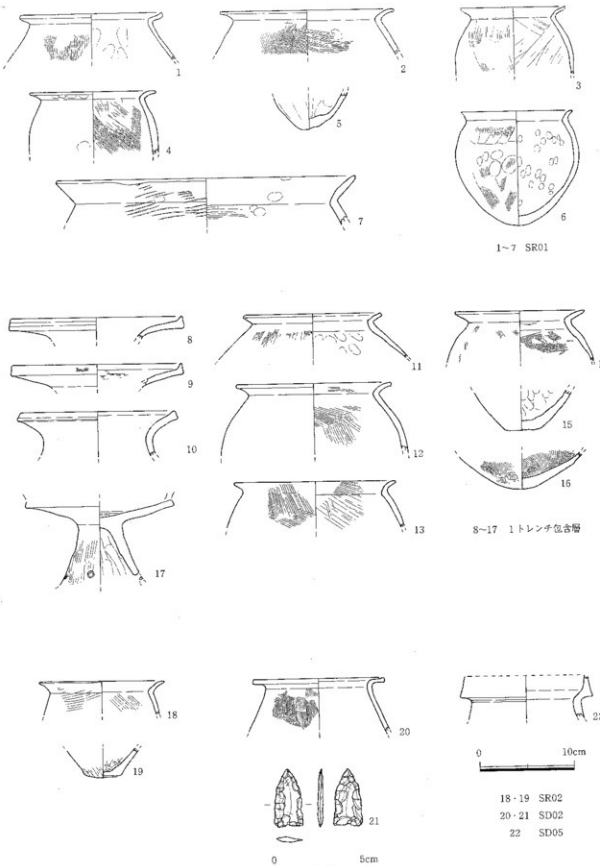
出土した土器には，胎土に角閃石を含む茶褐色系の精製土器「香東川下流域産土器」が一定量含まれている。「香東川下流域産土器」に関しては，本遺跡東方約２kmに位置する石清尾山塊周辺が粘土採掘地として指摘されており関連が注目される。

6　まとめ

以上のように，試掘調査を行った範囲全域で遺構・遺物が認められた。よって工事を行う際には事前の保護措置が必要であると考えられる。（池見）



第８図　平面図・断面図（１／300・１／40）



第9図　包含層および遺構出土遺物実測図（S＝土器1／4・石器1／2）

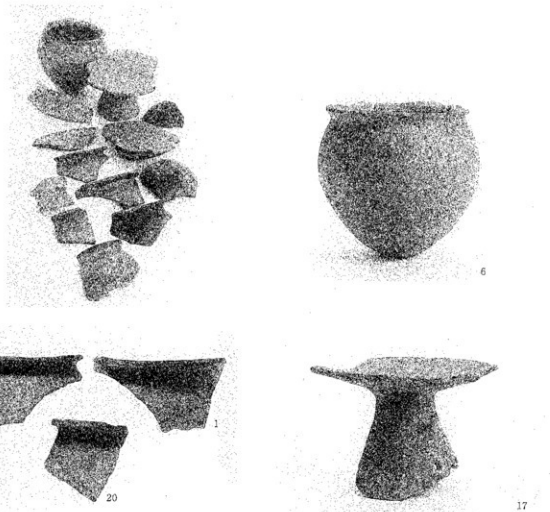


写真4　出土遺物写真　　※番号は，第9図に対応

香川町浅野地区（かがわちょうあさのちく）

1　所在地　高松市香川町浅野
　　（浅野浄水場内）
2　調査期間　平成23年3月17日
3　調査担当者　波多野 篤
4　調査の原因　管理棟新築工事
5　調査の概要

香川町浅野に所在する浅野浄水場内で管理棟の新築工事が計画され，龍満山古墳群に隣接するため試掘調査を行った。試掘調査は，管理棟の建設が予定される西側と東側の丘陵裾部に3本のトレンチを設定して調査した。しかし，いずれのトレンチでも遺構・遺物ともに認められなかった。

6　まとめ

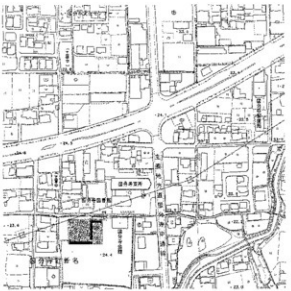
今回の試掘調査ではいずれのトレンチでも遺構・遺物ともに認められず，保護措置は不要と判断した。

第10図　調査地位置図

国分寺町新居地区

1　所　在　地　高松市国分寺町新居
2　調 査 期 間　平成23年３月28・29日
3　調査担当者　波多野 篤
4　調査の原因　高松西部地域文化施設
　　（周辺道路）建設
5　調査の概要

文化施設の本体建物が建設される箇所は，平成22年８月に試掘調査を行い埋蔵文化財包蔵地ではないことが判明している。しかし，周辺に施工される道路については未調査で，一定程度の工事面積であることを考慮して試掘調査を実施した。調査は，道路が設置される箇所に３本のトレンチを設定して行なったが，近世以降の土層から掘り込まれた４条の溝を検出した以外は，遺構・遺物ともに認められなかった。



第11図　調査地位置図

6　まとめ

以上の結果から，埋蔵文化財包蔵地ではないと判断し，事前の保護措置は不要と判断した。

多肥上町宮尻地区

1　所　在　地　高松市多肥上町
2　調 査 期 間　平成23年５月９日
3　調査担当者　高上　拓
4　調査の原因　集合住宅建設工事
5　調査の概要

調査対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地「日暮・松林遺跡」に近接することから，事業者の任意協力を得て試掘調査を実施した。試掘に当たっては４箇所のトレンチを設定した。

試掘の結果，いずれのトレンチでも表土・床土を20cm程度掘削すると，円礫混じりの灰黄砂層を検出した。遺構・遺物ともに検出することは出来なかった。周辺住民によると，戦前まで一段高い丘上の地形を呈しており，空港の造成に削平したとの情報を得た。この示唆は発掘調査成果からも首肯できるため，当地が本来は微高地であり，既に削平されたものと考えられる。

第12図　調査地位置図

6　まとめ

対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地とは認められない。

史跡讃岐国分尼寺跡（しせきさぬきこくぶんにじあと）
～第11次調査～

1　所在地　高松市国分寺町新居
2　調査期間　平成23年５月９日～６月９日
3　調査担当者　渡邊　誠，池見　渉
4　調査の原因　確認調査
5　調査の概要
a　これまでの経緯と調査目的

今回の調査対象地は法華寺のほぼ真北に位置し，現在は市有地である。畦畔には礎石らしき大型石材が点在しており，礎石建物の存在が想定されている箇所である。調査は建物の広がりを確認することを目的として実施した。

b　調査成果（第14・15図）

① 基本層序

調査地の基本層序は上から耕作土（別添調査区土層図の①～⑦（以下省略）の第１層），床土（第２a・b層），黄褐色細礫混じり粘質土（第３a～b層），オリーブ褐色細礫混じり細砂（遺物を含む：第４層），灰黄色礫混じり粘質土（地山／基壇土：第６層）である。第４層が礎石を覆っており，上屋の廃絶年代の上限を示す。ただし，東側トレンチでは東に向かってゆるく傾斜しており，第６層直上に瓦を多量に含む堆積層（暗灰黄色礫混じり細砂：第５層）が認められた。

第13図　調査地位置図

② 遺構

遺構は第６層に掘り込む状況で，礎石および礎石抜き取り痕跡を確認したほか，多数の柱穴などを確認した。礎石列は，東西方向に５列，南北方向に３列確認し，最北の礎石列の北側には，礎石列と平行して東西方向に走る雨落ち溝を確認した。現状で，桁行４間，梁間２間で，東西棟の建物が想定される。柱間距離は東西方向が３m（約10尺），南北方向は北側が３m（約10尺），南側は3.6m（約12尺）である。地覆石などの柱間装置は確認できなかった。

礎石のある面は現在の地形から南側，東側が大きく削平されていることが明らかとなった。基壇の構造は断ち割りを実施していないことから今後の調査の課題であるが，雨落ち溝北側の土層観察から建物の北側はさらに高かったと考えられ，周辺の地山の土質との比較からも，基壇構築は地山の削りだし等による造成の可能性が想定される。ただし，この点については将来の面的な調査での検証が不可欠である。この他の遺構は検出にとどめたため，時期等は不明である。

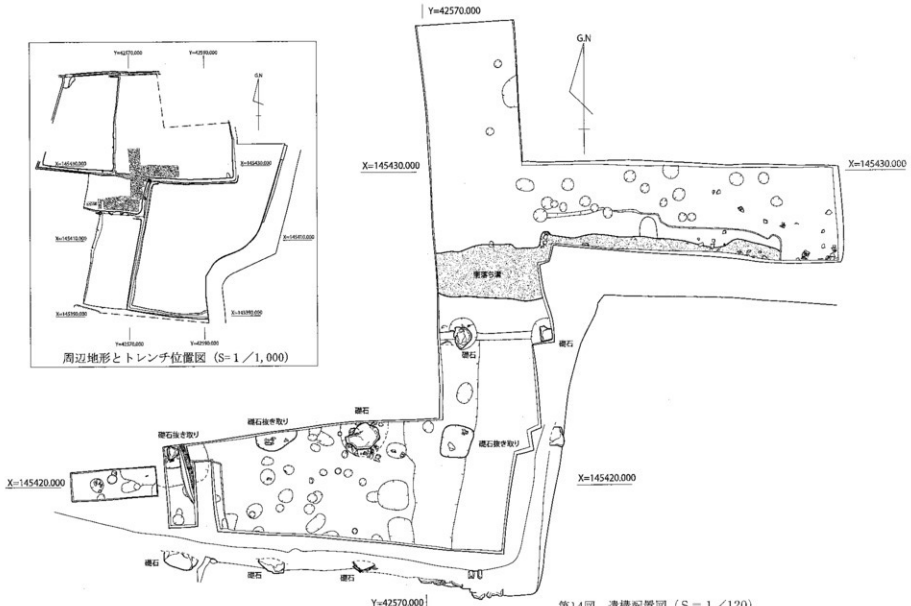
③ 出土遺物

雨落ち溝検出面で瓦が多量に出土し，前者からは創建期と考えられている十六葉細弁蓮華文軒丸瓦も出土した。この他に東側トレンチの堆積層には多量の土器，瓦が出土し，瓦には平安時代末の瓦も含まれていた。遺構検出時等で出土した遺物および，礎石や遺構の検出面で出土したものの一部を採取したものが第16～20図である。出土遺物から12世紀前後までは建物が存続した可能性があり，13世紀には建物が失われてしまったと考えられる。

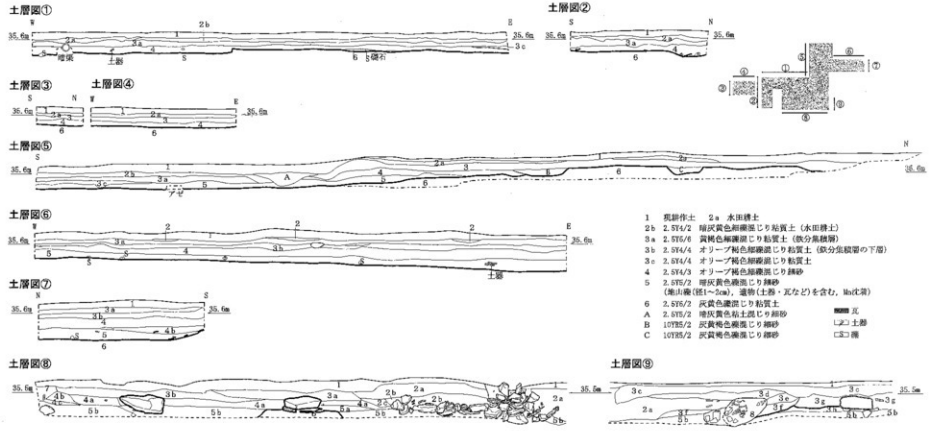
6　まとめ

以上のように，金堂の北側で確認した礎石建物は，その位置関係から尼房（僧房）跡と推定される。建物規模については，調査区南側，東側が後世の地下げによって削平されており，今回の調査で北限を確定するのみにとどまったが，西側は同レベルの地形が展開しており，今後の調査が期待される。この推定尼房跡と金堂跡（現法華寺境内）との間には講堂跡が展開している可能性が高く，その存在を示す礎石が現在の法華寺北側で確認できる。このような点から，今回の調査区周辺を中心に調査を行うことで，讃岐国分尼寺跡の構造解明に繋がるものと考えられる。（渡邊）

周辺地形とトレンチ位置図（S=1／1,000）



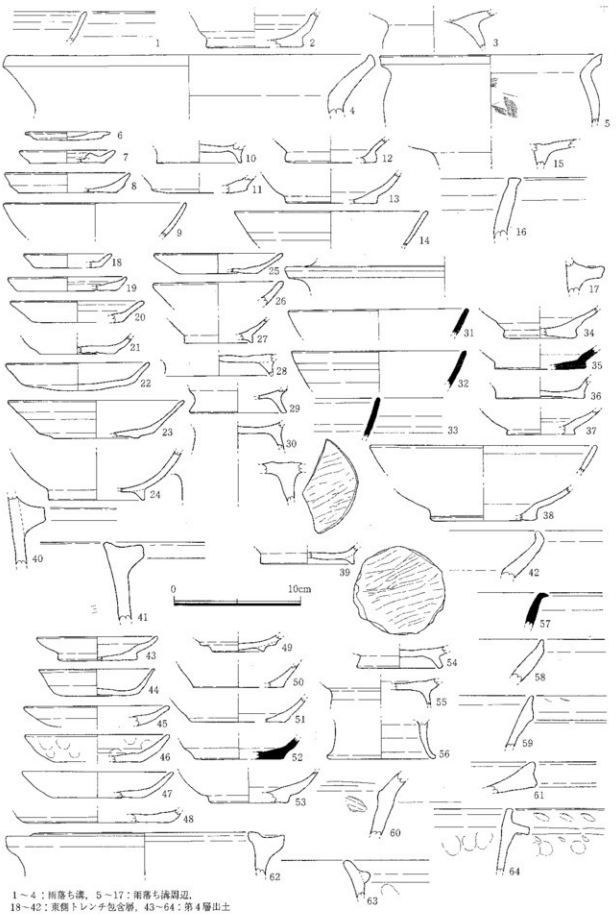
第14図　遺構配置図（S＝1／120）



1　現耕作土　2a　水田耕土
2b　2.5Y4/2　暗灰黄色細礫混じり粘質土（水田耕土）
3a　2.5Y6/6　黄褐色細礫混じり粘質土（鉄分集積層）
3b　2.5Y4/4　オリーブ褐色細礫混じり粘質土（鉄分集積層の下層）
3c　2.5Y4/4　オリーブ褐色細礫混じり粘質土
4　2.5Y4/3　オリーブ褐色細礫混じり細砂
5　2.5Y5/2　暗灰黄色礫混じり細砂
（地山礫（径1～3cm），遺物（土器・瓦など）を含む，lm以深）
6　2.5Y6/2　灰黄色礫混じり粘質土
A　2.5Y5/2　暗灰黄色粘土混じり細砂
B　10Y5/2　灰黄褐色礫混じり細砂
C　10Y5/2　灰黄褐色礫混じり細砂
瓦
土器
陶

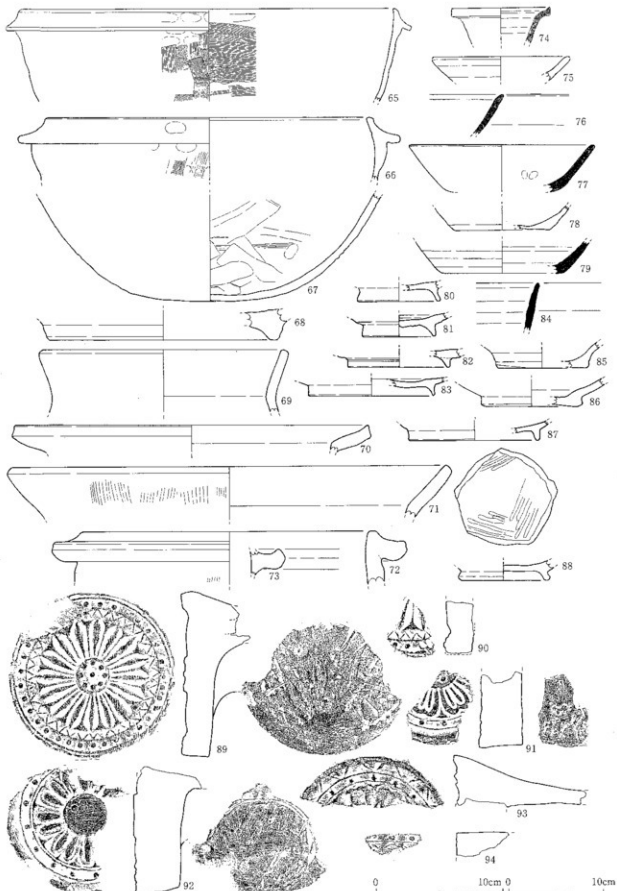
0　7.5YR4/1　褐灰色シルト質土（水口改修土）
1　耕作土
2a　2.5Y5/3　黄褐色シルト質土
2b　2.5Y5/2　暗灰黄色シルト質土
2c　2.5Y4/3　オリーブ褐色シルト質土
3a　10YR6/4　にぶい黄褐色シルト質土
3b　2.5Y6/4　にぶい黄色シルト質土
3c　10Y7/1　灰白色シルト質土
3d　10YR6/3　にぶい黄橙色シルト質土
3e　10YR6/3　にぶい黄褐色シルト質土
3f　10YR7/2　にぶい黄橙色シルト質土（2～6cmの角礫を多量に含む）
3g　10YR6/2　灰黄褐色シルト質土
3h　10YR5/2　灰黄褐色シルト質土（2～5cmの角礫を多量に含む）
4a　10Y4/2　灰黄褐色粘質シルト（1～2cmの砂礫を少量含む）
4b　10YR6/2　灰黄褐色粘質シルト
4c　10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト
5a　2.5Y3/1　黒褐色シルト質土
5b　2.5Y3/1　黒褐色シルト質粘質土
6　2.5Y3/1　黒褐色シルト質粘質土
（10Y2/2 にぶい黄橙色　砂礫土を多量に含む）≒地山もしくは基盤土
7　10YR5/3　にぶい黄褐色シルト質土（呼称排水埋め戻し土）
8　10YR5/3　にぶい黄褐色シルト質土（瓦を多量に含む）

第15図　調査区土層図（S＝1／70）



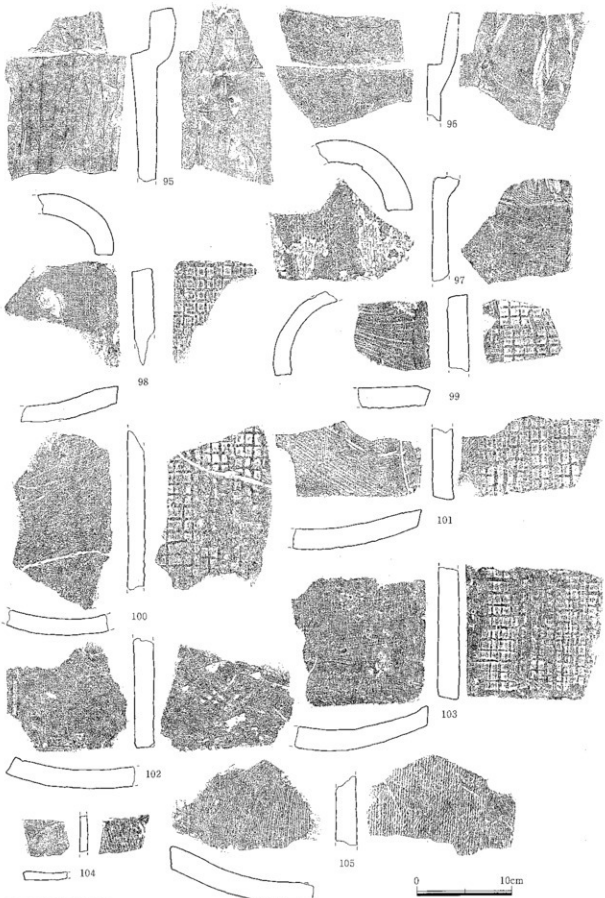
1～4：雨落ち溝，5～17：雨落ち溝周辺，
18～42：東側トレンチ包含部，43～64：第4層出土

第16図　出土遺物実測図(1)



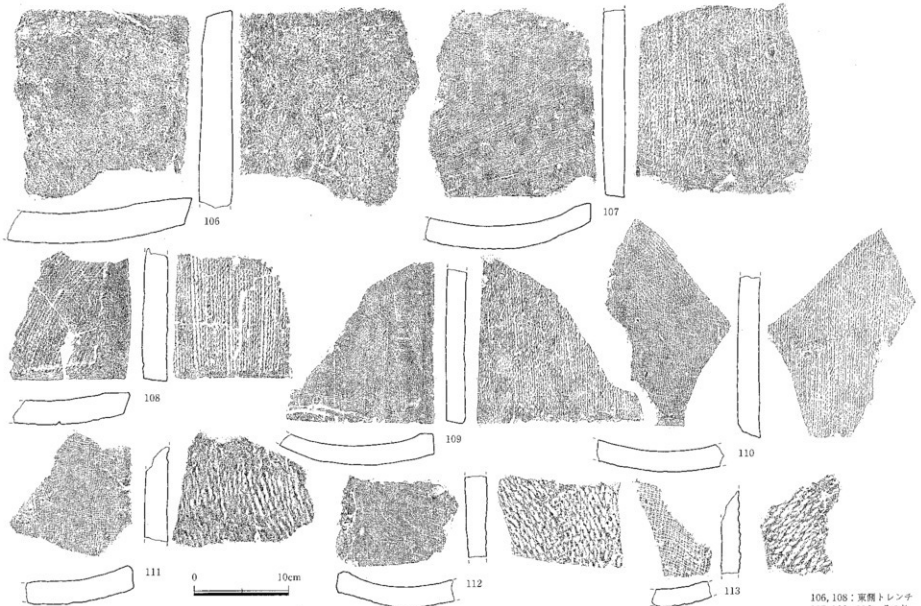
65：第4層出土，66～88，90，91，94：その他，
89，92：南落ち溝

第17図　出土遺物実測図(2)



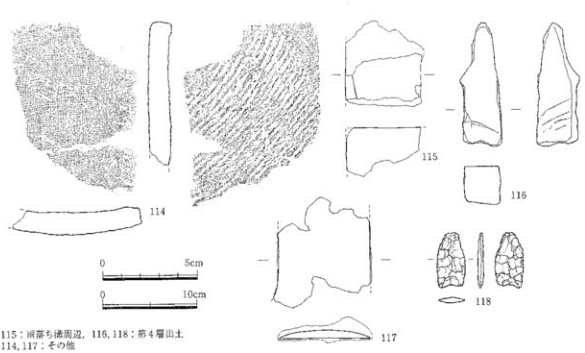
96, 101, 102：雨落ち溝
95, 97～100, 103～105：その他

第18図　出土遺物実測図(3)



106, 108：東側トレンチ
107, 109～113：その他

第18図　出土遺物実測図(4)



115：雨落ち溝周辺，116, 118：第4層出土
114, 117：その他

第20図　出土遺物実測図(5)

通り谷遺跡（とおだにいせき）

1　所　在　地　高松市三谷町
2　調 査 期 間　平成23年6月6日～11月1日
3　調査担当者　高上　拓
4　調査の原因　墓園区画造成工事
5　調査の概要

調査対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地「通り谷遺跡」内に位置する。現地形を見ると，尾根の頂部を含む大規模な範囲が既に削平された状態であり，自然地形が残存する部分について，範囲確認のための確認調査を実施した。

7箇所のトレンチを設定して掘削を行った。いずれも尾根頂部よりもやや降った斜面部に設定したトレンチである。全てのトレンチで，表土下10cm～20cmの深度で地山と考えられる橙色極粗砂を検出した。遺構は全く検出することが出来ず，唯一2トレンチの表土下流土中から土師器体部片が検出できたのみである。この土師器は器壁と調整の様相から弥生土器片である可能性が考えられ，通り谷遺跡で過去検出された土器棺等の一部である可能性も考えられる。

第21図　調査地位置図

6．まとめ

調査地は周知の埋蔵文化財包蔵地であるが，今回の調査範囲には埋蔵文化財の包蔵状況は認められなかった。

相作馬塚（あいさこうまづか）

1　所在地　高松市鶴市町
2　調査期間　平成23年5月25日～6月23日，
　　平成23年9月26日～10月7日
3　調査担当者　高上　拓・池見　渉
4　調査の原因　農地整備工事
5　調査の概要

第22図　調査地位置図

(1) 経緯

調査対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地「相作馬塚」内に位置する。当該地において農地整備工事が計画されることから，地権者の了解のもと，事前に確認調査を行うこととなった。調査の結果，埋蔵文化財の包蔵状況が確認できた。

この結果を受けて，地権者と協議を行ったところ，墳丘北側の斜面部で，後述する中世墓を除いた範囲に限定して，開発行為を行う旨の文化財保護法第93条に基づく発掘届出が提出された。これを香川県教育委員会に進達したところ，工事立会の行政指導が出されたため，この範囲については工事立会で対応した。

以下では，この確認調査と工事立会の成果について報告する。

(2) 遺跡立地と現況

本遺跡は高松平野北西部に位置する。地形的には南東から北西に向かう緩傾斜の平地に位置し，浄願寺山西裾を北流する香東川とその西方を北流する本津川に挟まれた微高地上にあたる。

本遺跡は現在，遺跡東寄りにピークを有する独立丘状の高まりとして水田地帯に残存している。南側と西側に関しては著しい削平を受けていると考えられるものの，それ以外の箇所に関しては比較的良好な残存状況を示している。

後述するように本遺跡は丘状の地形（地山）を整形して構築されている。現在は香東川・本津川間のエリアにおいても既に平坦化が進んでいるが，かつては比較的起伏のある地形であったことが予想される。つまり，相対的に高い部分に後述するような遺構が形成され，周辺部の相対的に低い部分においては後世の耕地化に伴う地形の平坦化が進み，本遺跡は丘状の高まりとして取り残されたものと考えられる。

(3) トレンチ配置

確認調査・工事立会において計6箇所のトレンチを設定した。

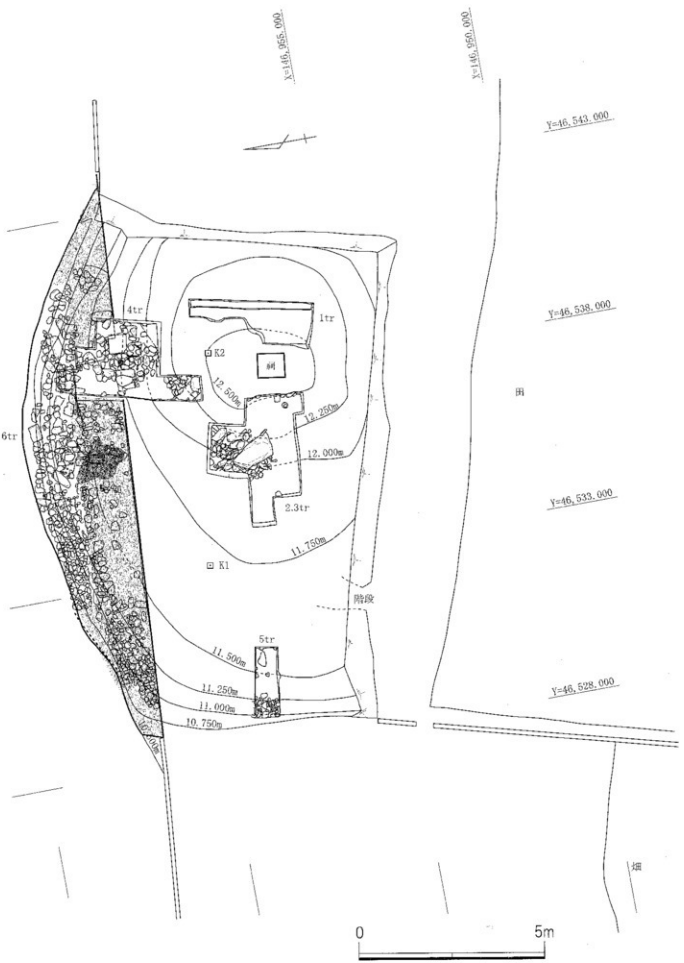
1～4トレンチは塚東寄りの高まり部の状況把握を目的に設定したトレンチである。まず，塚頂部の状況確認を目的として1・2トレンチを設定し，さらに塚頂部西側の斜面における傾斜変換点の性格を確認するため，3トレンチを設定した。結果として，2・3トレンチは連結することとなり，また後述する貼石状遺構の広がりを確認するため，3トレンチを南北方向に面的に拡張した。

さらに，高まり部北側斜面の状況を確認するため4トレンチを設定した。4トレンチでは後述するST01を検出し，その広がりを把握するため，東方に面的な拡張を行った。

5・6トレンチは塚西側から北側にかけての裾部付近の状況把握を目的に設定したトレンチである。5トレンチは塚西側に設定した。6トレンチは塚北側に設定し，当初，2か所のトレンチに分けて確認調査を行い，上半部に関しては，工事立会を行った。報告に際しては，これら2か所のトレンチと工事立会範囲をまとめて6トレンチとする。

(4) 検出遺構の概要

ここでは，1～4トレンチと5・6トレンチに分けて遺構の概要を示す。前者は塚高まり部における遺構確認の成果を報告するものであり，貼石状の遺構とテラス面，ST01で構成される。後者は裾部付近の遺構確認の成果を報告するものであり，裾部付近をめぐる一連の石積みを確認した。



第23図　地形測量図およびトレンチ配置図　　＝工事立会対象範囲

a　塚頂部付近（1～4トレンチ）

基本層序　1・2・3トレンチでは表土下に暗褐色系の堆積層（1層）がみられる。これらは塚頂部付近にのみ堆積しており，後述する人為的な盛土層とは異なり，腐食土層等の自然堆積層であると考えられる。

3トレンチ2・3層および4トレンチ1層は褐色あるいははにぶい黄褐色系の堆積層である。これらは後述する5トレンチ1・2層および6トレンチ1層と同様，近代以降の人為的な盛土層であると考えられる。さらに4トレンチ2・3層はST01を覆う堆積層であり，5トレンチ3・4層や6トレンチ4・5層に相当する中世の盛土層であると考えられる。

4トレンチでは，盛土層下位に地山風化土とみられるにぶい黄褐色系の堆積層（4・5層）が堆積している。特に4層は粘りが極めて強く，比較的明るい色調を呈する。1トレンチにおいても地山上に褐色シルトが堆積している（2層）。塚頂部であり，また2トレンチでは存在しないことから，人為的な盛土層とみるよりは，地山風化土であるとみた方がよいと考える。

墳丘斜面への貼石とテラス面の形成（2～4トレンチ）

独立丘状地形東寄りの高まり部において，地山を整形し，西斜面から北斜面にかけて板石および円礫を貼り付ける状況を確認した（貼石状遺構）。貼石は3～4トレンチ内で収束することから南斜面には連続しないことがほぼ確実である一方，4トレンチ東側には連続している可能性がある。いずれにしても，北側に入念に貼石を施す状況がうかがえる。貼石状遺構前面には幅2m前後のテラス面が形成されており，両者は一連の遺構であると考えられる。テラス面については，高まり部の西側から北側にかけてのみ検出している。

写真5　3トレンチ墳丘高まり部への貼石

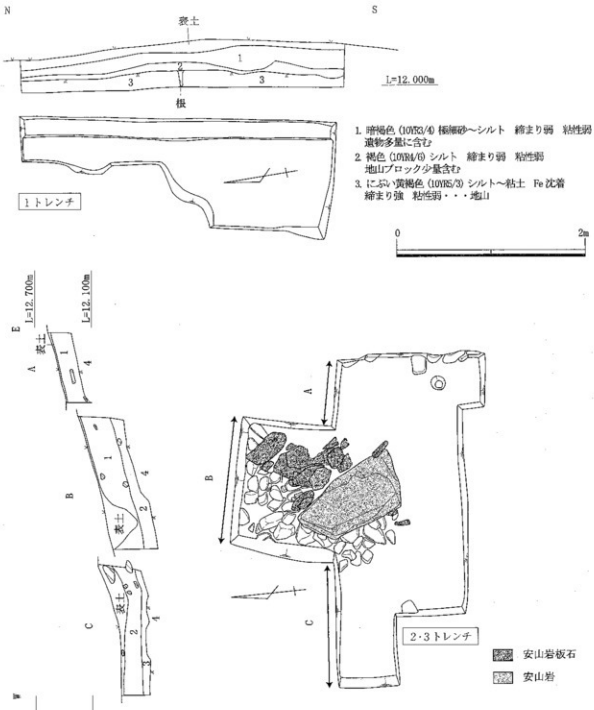
貼石状遺構・テラス面直上出土の遺物は皆無であり，また貼石は現地保存のため検出のみにとどめ，完掘を行っていないことから，直接的に時期比定できる遺物は出土していない。しかし，貼石状遺構・テラス面を覆う2・3トレンチ1・2層の堆積時期からその形成時期を類推することは可能である。

第26図1～10は3トレンチ1・2層から出土した遺物である。1は足釜の口縁部であり，瘤状に痕跡的に残存する鍔部の形態から佐藤編年（佐藤1995）のⅢ期に属するものと考えられる。4・5は甕であり，特に5に関しては，口縁端部を丸くおさめるA類Aあるいは B の形態を痕跡的に認めることができ，第Ⅱ期第2段階あるいは第Ⅱ期第3段階に属するものであると考えられる。その他，近世以降に属すると思われる土師質土器や陶器も含まれている（2・3・6～9）。

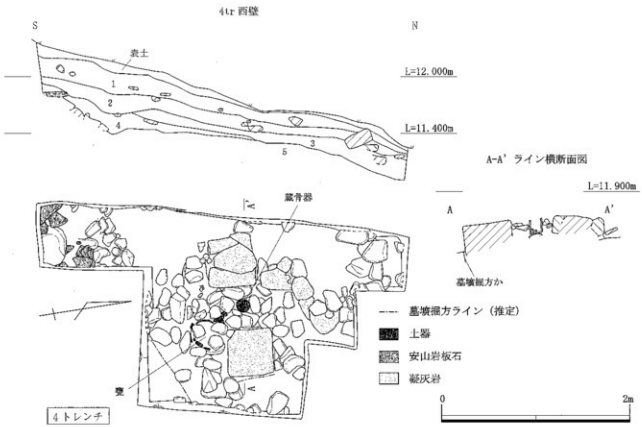
以上より3トレンチ1・2層は近世以降に形成された堆積層であり，1・2層に覆われる貼石状遺構・テラス面は少なくとも近世以前に形成された遺構と考えられる。

一方で，2・3トレンチ1・2層や2・3トレンチ周辺の表土から石造物石材が数基分出土している（13～19）。時期により比較的明瞭な形態変化を示す空風輪に着目すると，15を除きいずれも天霧山産凝灰岩製である。天霧山産凝灰岩製石造物の生産が本格化する時期は鎌倉時代後期からであることが指摘されているが，とりわけ中世段階の五輪塔については空輪と風輪の分割成形が特徴として挙げられている（松田2009）。一方，本遺跡で出土した天霧山産凝灰岩製五輪塔の多くは，空輪と風輪を一石で製作しているものが多く，また15の空輪部は，直線的に上方に延びた後，上端付近に最大径を有する空輪の形態としては新相を呈するものである。これらの点から，15～17の空風輪は近世に製作されたものと推測でき，これらと組み合うことが想定される18・19の火輪も当該期に属するものと考えられる。13も出土位置・出土層位から考えて同じ時期が考えられる。多くは塚頂部から転落した状況で1・2層に含まれており，13は塚頂部において倒木の根に抱きかかえられるような状況で出土した。このため，近世には塚頂部に石造物が建立されていた可能性がある。

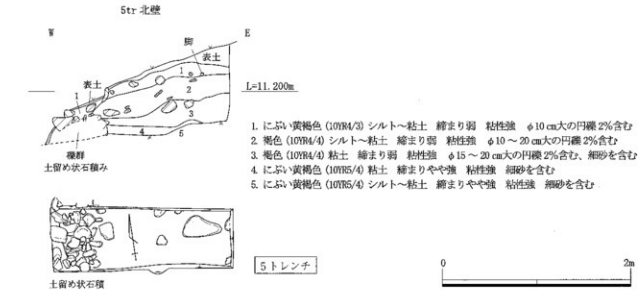
さらに2・3トレンチ表土からは円筒埴輪片が出土している。いずれも台形あるいは，極めて低平化した痕跡的なタガおよび円形の透かしを有する。外面調整では，二次調整のヨコハケを欠く一方で，タガ部には明瞭なヨコナデがみられる。これらの特徴から，川西編年（川西1978）のV期（TK23～T



第24図　1～3トレンチ平面図・断面図

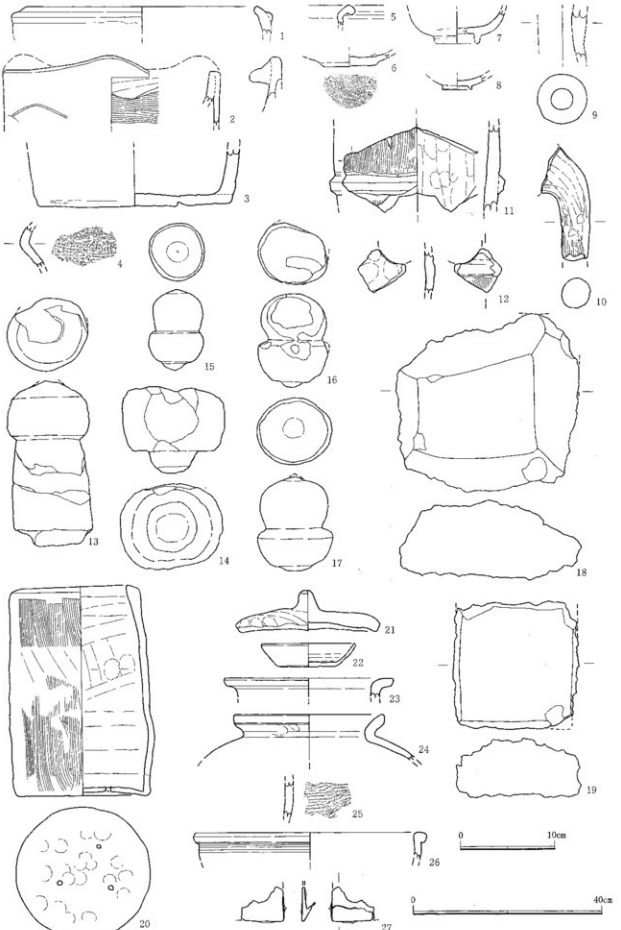


1. にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト～粘土　締まり弱　粘性強（φ10～15㎝大の円礫2%含む）遺物含む
2. 褐色（10YR4/4）粘土　締まり弱　粘性強　（φ15㎝大の円礫2%含む、細砂を含む）遺物含む
3. 褐色（10YR4/4）シルト～粘土　締まり弱　粘性強（φ20㎝大の円礫2%含む）遺物含む
4. にぶい黄褐色（10YR5/4）粘土　締まり弱　粘性強　（細砂を含む）遺物含まない
5. にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト～粘土　締まりやや強　粘性弱　（細砂を含む）遺物含まない



1. にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト～粘土　締まり弱　粘性強　φ10㎝大の円礫2%含む
2. 褐色（10YR4/4）シルト～粘土　締まり弱　粘性強　φ10～20㎝大の円礫2%含む
3. 褐色（10YR4/4）粘土　締まり弱　粘性強　φ15～20㎝大の円礫2%含む、細砂を含む
4. にぶい黄褐色（10YR5/4）粘土　締まりやや強　粘性強　細砂を含む
5. にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト～粘土　締まりやや強　粘性強　細砂を含む

第25図　4・5トレンチ平面図・断面図



第26図　2～4トレンチ出土遺物実測図

K10）に属するものであると考えられる。タガ部のヨコナデの有無を参考にすると，隣接する相作牛塚古墳出土の円筒埴輪と同様，Ⅴ期新相（MT15前後）の時期が考えられる。

ST01（4トレンチ） 貼石状遺構北側のテラス面上で検出した遺構である。検出状況から，上部が削平されているもののほぼ原位置を保っているものと考えられる。おおよそ1.8m四方の範囲内に一辺約0.6mの凝灰岩切石（五輪塔地輪か）2石と人頭大の円礫を集積する状況を確認した。また，一部で墓壙掘方を検出した。主軸は磁北より約25°西に振るものの，凝灰岩2石はほぼ東西に並んでいる。なお，本遺構は上面検出のみにとどめ，現地で保存したため，下部構造については不明である。

写真6　4トレンチST01

本遺構からはほぼ完形に復元可能な蔵骨器とみられる筒状の土師質土器（第25図20）と土師質の甕，骨片が出土している。蔵骨器はST01のほぼ中央部で出土した。蔵骨器の周囲には円礫が巡らされ，蔵骨器を支持する状況がみられる。蔵骨器内部底面には土師質の小皿（22）が収められていたが骨片等は出土しなかった。また，蔵骨器に伴うとみられる蓋（21）も複数個体分出土している。

甕はST01南東寄りで出土した。体部最大径以下が残存している。検出のみにとどめ内部の土を除去しなかったため，内容物については不明である。また，甕自体も現地に埋め戻している。

骨片は3cm×1cm程の大きさであり，集石遺構南西寄りで出土した。土器等に納められた状況はみられず，円礫間に充満した堆積土中に含まれていた。人骨か否かは不明であり，部位も不明である。

さて，ST01の形成時期であるが，蔵骨器はいわばST01の主体部であり，ST01の築造時期を決定する上で重要な資料となる。蔵骨器内部にはめ込まれた小皿の形態から佐藤編年第Ⅰ期～第Ⅱ期第1段階に属するものと考えられ，したがってST01は，14世紀前半に形成されたと考えられる。集石間から出土した他の土器片（23～25）についても同様の時期が考えられ，また中世の盛土層と考えられる4トレンチ2・3層にST01が覆われる事実もそれと矛盾しない。

その他，1層や2層からは近世以降に属すると考えられる施釉陶器（26）や器種不明の鉄器片（27）が出土している。

小結　以上，塚高まり部における検出遺構の概要を示した。貼石を重点的に施した塚高まり部北側のテラス面上にはST01が形成されている。よって塚高まり部斜面への貼石やテラス面形成も墓域造成に伴う行為であるとみられる。さらに，その形成時期についても，14世紀前半に形成されたとみられるST01がテラス面上に形成されていることから，ST01形成よりやや先行して行われた可能性もあるが，ほぼ同時期に形成されたとみられる。

以上より，塚高まり部斜面への貼石とテラス面の形成，ST01の形成は一連の行為であるとみることが可能であり，その時期は14世紀前半頃と考えられる。本遺跡で出土する中世の遺物のうち最も古相の遺物はⅠ期に属するものであり，中世段階での本遺跡における土地利用がⅠ期前後に始まったことを示唆する。この事実からもこれらの遺構が14世紀前半頃に形成されたと推測することができる。一方で，近世に五輪塔が建立されていた痕跡が読み取れ，墓域としての土地利用が少なくとも近世段階まで引き継がれたことを示唆する。（池見）

b　塚西側から北側裾部（5・6トレンチ）

5　トレンチ

丘陵西端の斜面部分に，塚の西端を確認するために設定したトレンチである。調査の結果，表土から地山まで約0.8m程度の厚い堆積層（第25図1～4層）を確認した。いずれも締まりの弱いシルト～粘土層である。地山層は東に向かって緩やかに傾斜が上昇するものの，比較的平坦である。2・3トレンチでは，丘陵の傾斜に沿って比較的浅い位置で地山層を確認しているが，これと対比すると5トレンチでは地山層が現地形の傾斜とは合致せず，水平に堆積している。地山直上の4層からは後述する多量の遺物が出土しているため，5トレンチでは平坦な地山上に多量の土砂の堆積がなされたことが分かる。トレンチ西端では，1・2層を除去したところ，川原石の円礫を主体として，板石を含む石

材を多量かつ不規則に盛上げた石積みを検出した。丘陵の端部にあたる位置で確認した人為的な礫の集中であり，後述する6トレンチでも同様の遺構を確認している。出土状況から，丘陵の輪郭線を画する石積みで軟弱な墳丘内の盛土の土留めの機能も果たしていた可能性が考えられる。以下では土留め状石積みと呼称する。この土留め状石積みの内側に堆積した1～4層は，堆積状況から人為的な塚の盛土と考えられる。

出土遺物であるが，第29図28～36は4層出土，37は土留め状石積み中出土である。28は土鍋の口縁部である。直線的で鋭角な口縁部がやや強く外反する。29は土鍋の口縁部である。口縁部内面が受口状に強く湾曲する。口縁部全体では緩やかに外反する。30～35は土釜である。31はやや口縁部が直立気味であり，鍔部を折り曲げて製作した後に口縁端部を貼り付けている。ハケ目は明瞭でない。32は内湾する口縁部をもち，丸みを帯びたプロポーションである。鍔部を貼り付けて製作する。33は口縁端部に強いナデが施され，器壁がやや薄く仕上げられている。鍔部は貼り付けて製作される。内面にはヨコハケが顕著に観察できる。34は鍔部を貼り付けて製作するが，鍔部が短く，ナデにより下方に向かって強く張り出す断面形状を呈する。調整は不明瞭である。35は足釜の脚部である。内面にはヨコハケが複数単位重複して施される。脚部外面はナデによって仕上げられる。土鍋はA1類とB1類が認められ，土釜は口縁部と鍔部がほぼ同じ長さのものから，厚い口縁部に短い鍔部が付くものまであり，足釜BⅢ類～BⅣ類に相当する。これらの遺物から，佐藤編年の第Ⅱ期第2～3段階に該当するものと考えられる。また，混入品であるが，須恵器片も出土している。36は須恵器杯身の口縁部片である。短い受け部に短い口縁部が続き，端部は丸く収める。37は須恵器高坏の杯～脚部である。方形の透孔が3方向に認められ，脚部の径が比較的大きい。

小結　5トレンチでは，塚の西端を形成する土留め状石積みの一部を確認した。また，平坦な地山上に土留め状の石積みを行い，その内側に盛土を行うことで塚の西側を成形していることが明らかになった。出土遺物から，こうした塚西部の形成は15世紀前後になされたものと考えられる。2・3トレンチの状況と対比すると，丘陵の高まり部分については地山の隆起を利用している一方で，西側については意図的な盛土による塚の形成が認められる。

6トレンチ

調査の経緯にて詳述したとおり，塚北側で実施した試掘調査とその後の工事立会の成果を併せて6トレンチとして報告する。塚北側全域にわたる広い調査区であるため，まずは南壁を基に基本層序を確認しておきたい。

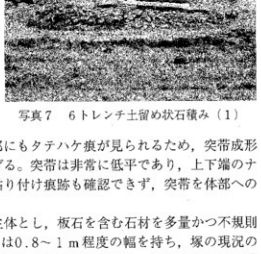


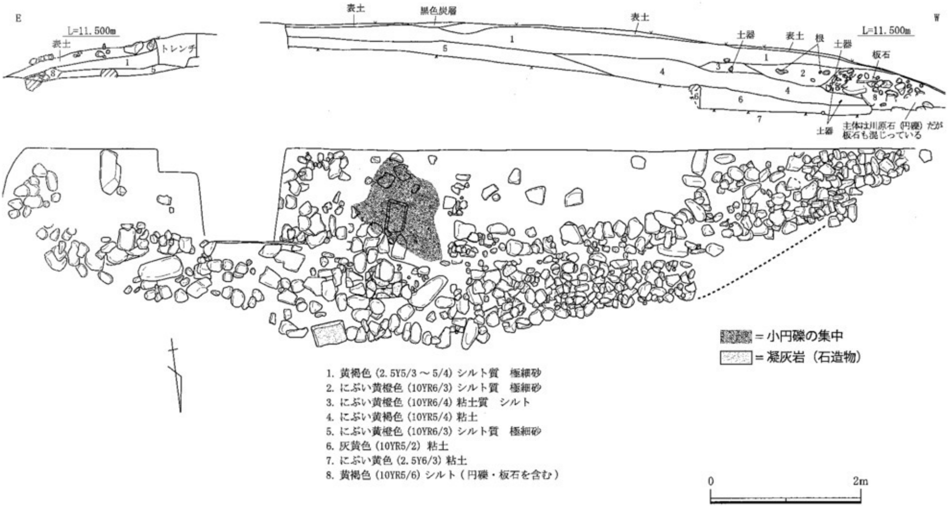
写真7　6トレンチ土留め状石積み（1）

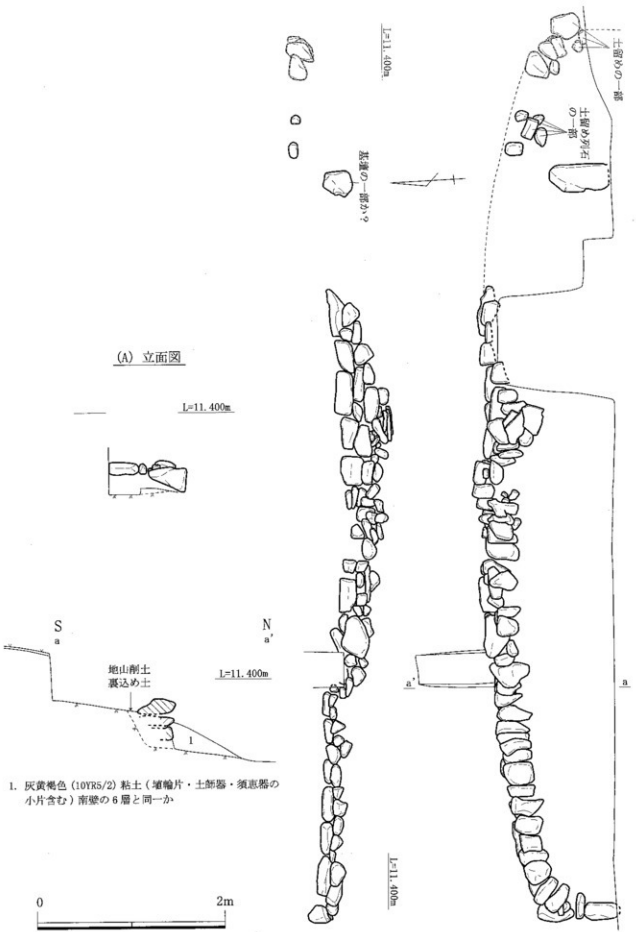
第27図を基に，上層から順に整理すると，まず現表土の下層に広く黄褐シルト層（1層）が堆積する。周辺より一段高い現地形から自然堆積とは考えがたいため，人為的な盛土の可能性が考えられる。図示していないが，出土遺物からは近世以降の時期が想定できる。また，円筒埴輪片も本層から出土している。第28図44は円筒埴輪である。突帯部の破片であり，円形の透孔が残存する。黒斑は見られない。外面調整はタテハケである。突帯頂部にもタテハケ痕が見られるため，突帯成形後にもハケ調整を行ったようである。内面はナデで仕上げる。突帯は非常に低平であり，上下端のナデによる窪みにより突帯が強調されているに過ぎない。貼り付け痕跡も確認できず，突帯を体部への強いナデによる凹凸で作り出している可能性が高い。

根撹乱などを除くと，1層の下層で，川原石の円礫を主体とし，板石を含む石材を多量かつ不規則に盛上げた堆積を検出することができた（8層）。この層は0.8～1m程度の幅を持ち，塚の現況の外形輪郭線に沿って北側へ張り出す円弧を描き，調査区東端から西端まで伸びる。この8層は塚の盛土流出防止や区画確定などの用途で構築された石積みであると考えられ，5トレンチで検出した土留め状石積みに対応する。

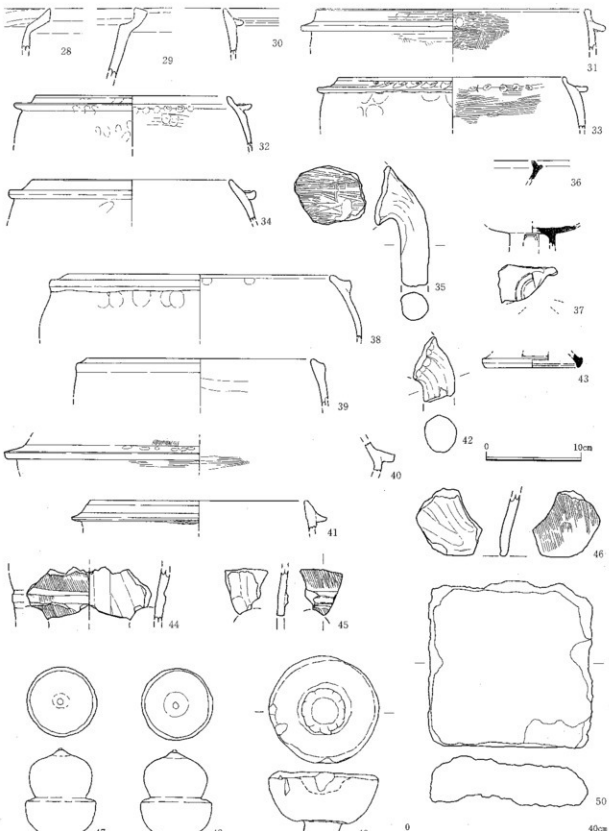
8層の下層には，にぶい黄褐シルト～粘土層（4・5層）が堆積している。いずれも中世の遺物を多量に含んでおり，堆積層も厚いことから，中世の盛土層と考えられる。4・5層を除去すると，下層から大振りな川原石を石段状に積んだ石列を検出した。詳細は後述するが，以下では基壇状石積みと呼称する。

第27図　6トレンチ土留め状石積み平面図・断面図





第28図　6トレンチ基壇状石積み平面図・断面図



第29図　5・6トレンチ出土遺物実測図

番号	出土位置（トレンチ/層位）	種別	器種	部位	調整		備考
					外面/文様等	内面/文様等	
1	3トレンチ/1・2層	土師質土器	足釜	口縁部から鍔部	ナデ/（鍔部下部）工具痕?	ナデ	
2	3トレンチ/1・2層	土師質土器	焼炉	上縁部	ナデ/浮き彫り有り	ヨコナデ、ヨコハケ/突起有り	
3	3トレンチ/1・2層	土師質土器	鉢?	底部	ナデ	ヨコナデ、指頭圧	底部は内外面ともに未調整で粗い仕上げ。
4	3トレンチ/1・2層	土師質土器	甕	頸部	ナデ、タタキ		
5	3トレンチ/1・2層	土師質土器	甕	口縁部	回転ナデ	回転ナデ	
6	3トレンチ/1・2層	陶器	灯明皿	底部	回転ナデ、底部糸切り	回転ナデ、施釉	
7	3トレンチ/1・2層	陶器	碗	底部	回転ナデ、施釉（透明釉）/染付有り	回転ナデ、施釉（透明釉）	
8	3トレンチ/1・2層	陶器	小皿	底部	ヨコナデ、施釉	施釉	
9	3トレンチ/1・2層	土師質土器	鞴羽口または高杯	（高杯）脚部		ナデ	人形埴輪腕部の可能性有り。
10	3トレンチ/1・2層	土師質土器	足釜	脚部	タテハケ、タテナデ		
11	3トレンチ/表土	土師質	円筒埴輪	突帯部	（突帯部）ヨコナデ、タテハケ	タテナデ、指頭圧	円形透かし有り。
12	2トレンチ/表土	土師質	円筒埴輪	突帯部	（突帯部）ヨコナデ、タテハケ	指頭圧	円形透かし有り。
13	頂部（祠の北側）表採		石塔	相輪?			国分寺。
14	2・3トレンチ/1層		五輪塔	風輪			凝灰岩（天霧B）製。
15	3トレンチ/1・2層		五輪塔	空風輪			花崗岩（天霧A）製。
16	2・3トレンチ/1層		五輪塔	空風輪			凝灰岩（天霧B）製。
17	2・3トレンチ/1層		五輪塔	空風輪			凝灰岩（天霧B）製。
18	2・3トレンチ/1層		五輪塔	火輪			凝灰岩（天霧B）製。
19	表採		五輪塔	火輪			凝灰岩（国分寺産?）。
20	4トレンチ集石墓	土師質土器	蔵骨器		ナデ、タテハケ、指頭圧	ヨコナデ、指頭圧	轆轤整形ではなく、歪みの目立つ粗い作り。 底部穿孔有り。
21	4トレンチ/1層（集石墓上面）	土師質土器	蔵骨器蓋		ナデ、指頭圧	ナデ、指頭圧	手捏ねによる粗い作り。
22	4トレンチ/（蔵骨器内部底面）	土師質土器	小皿		ヨコナデ、底部ヘラ切り	ヨコナデ	
23	4トレンチ/2層（骨片出土位置周辺）	瓦質土器または須恵器	甕?	口縁部	ヨコナデ	ナデ	
24	4トレンチ/（集石墓礫群間）	土師質土器	甕	口縁部	ヨコナデ、指頭圧	ナデ	
25	4トレンチ/（集石墓礫群間）	土師質土器			タタキ		
26	4トレンチ/2層	陶器	鉢?	口縁部	ヨコナデ、施釉/凹線有り	ナデ、施釉	
27	4トレンチ/1層	鉄器	鍬?	刃部			
28	5トレンチ/4層	土師質土器	鍋	口縁部	ナデ	ヨコナデ	
29	5トレンチ/4層	土師質土器	鍋	口縁部	ナデ	ヨコナデ	
30	5トレンチ/4層	土師質土器	足釜	口縁部から鍔部	ナデ	ナデ	
31	5トレンチ/4層	土師質土器	足釜	口縁部から鍔部	ヨコナデ、指頭圧	ヨコ・タテハケ、指頭圧	
32	5トレンチ/4層	土師質土器	足釜	口縁部から鍔部	ナデ、指頭圧	ナデ、指頭圧/爪痕有り	
33	5トレンチ/4層	土師質土器	足釜	口縁部から鍔部	ヨコナデ、指頭圧/爪痕有り	ヨコハケ、指頭圧/爪痕有り	
34	5トレンチ/4層	土師質土器	足釜	口縁部から鍔部	ヨコナデ、指頭圧	ナデ	
35	5トレンチ/4層	土師質土器	足釜	脚部から胴部	タテナデ	（胴部）ヨコハケ	
36	5トレンチ/4層	須恵器	杯身	口縁部	回転ナデ	回転ナデ	
37	5トレンチ/（土留め状石積み中）	須恵器	高杯	口縁部	回転ナデ	回転ナデ	三方向長方形透かし有り。
38	7トレンチ/（土留め状石積み中）	土師質土器	足釜	口縁部から鍔部	ナデ、指頭圧	ナデ、指頭圧	
39	7トレンチ/（土留め状石積み中）	土師質土器	足釜	口縁部から鍔部	ナデ	ナデ	
40	7トレンチ/（土留め状石積み中）	土師質土器	足釜	口縁部から鍔部	ヨコナデ、ヨコ・タテハケ、指頭圧	ヨコハケ	
41	7トレンチ/（基壇状石積み前面の置土）	土師質土器	足釜	口縁部から鍔部	ヨコナデ	ナデ	
42	7トレンチ/（土留め状石積み中）	土師質土器	足釜	脚部	タテナデ、指頭圧		
43	7トレンチ/（基壇状石積み前面の置土）	須恵器	高杯	脚端部	ヨコナデ	ヨコナデ	透かし有り。
44	7トレンチ/4～6層のいずれか	土師質	円筒埴輪	突帯部	（突帯部）ヨコナデ、タテハケ	タテナデ	円形透かし有り。
45	7トレンチ/（土留め状石積み中）	土師質	円筒埴輪	突帯部	（突帯部）ヨコナデ、タテハケ	ナデ、指頭圧	
46	7トレンチ/（基壇状石積み前面の置土）	土師質	円筒埴輪	底部	タテハケ	タテナデ	
47	7トレンチ/（土留め状石積み中）	石造物	五輪塔	空風輪			六甲花崗岩（御影石）製。
48	7トレンチ/（土留め状石積み中）	石造物	五輪塔	空風輪			六甲花崗岩（御影石）製。
49	7トレンチ/（土留め状石積み中）	石造物	宝塔				凝灰岩（天霧B）製。 穴を穿つ際の工具痕有り。
50	7トレンチ/（土留め状石積み中）	石造物	五輪塔	地輪			凝灰岩（国分寺産?）。

表１　相作馬塚出土遺物観察表

土留め状石積み　検出状況は基本層序で記述したが，現況で塚の輪郭線に沿って形成されていることから，塚が現況の形状を形成するにあたって，その区画と盛土の流出防止の機能を有した石積みの可能性が考えられる。

出土遺物であるが，第29図38～40・42・45が土留め状石積み中より，47～50が土留め状石積み直上より出土している。38・39は土師器土釜である。口縁部が強く内湾してすぼまる形状を呈する。丸く収めた口縁部に低い鍔部を貼り付けている，内外面ともに最終調整はナデで仕上げる。39はやや直立気味の口縁部である。受け部は弱い突出程度になり，貼り付けではなく口縁部と一体に製作される。40は大型の土釜の受け部である。受け部から体部にかけての屈曲が明瞭で強い。受け部は貼り付けて成形される。42は足釜の脚部である。外面はナデで仕上げ，断面形状はいびつな円形を呈する。45は円筒埴輪片である。円形の透孔が確認できる。低平で断面形状台形を呈す突帯を貼り付けている。外面調整はタテハケである。47・48は五輪塔の空風輪である。土留め列石の上面から倒落した状況で検出した。花崗岩製で空輪と風輪を一体的に作り出しており，底部には軸部にあたる突起をもつ。49は水輪である。上面には軸受けの凹みを作り出し，底面には軸部を作り出す。50は地輪である。風化が著しく，本来の形状からかなり削れてしまっているが，上面にむかってやや頂面が狭くなる形状を呈し，底面はやや凹んで，えぐれたような形状を呈する。遺構の形成時期を示すものと推測される遺構中より出土した遺物を見ると，38・39は鍔部と口縁部の境界があまり明瞭ではなく，特に39では瘤状の突起と化している。足釜C類に分類される資料であり，所属時期は佐藤編年の第Ⅲ期に比定される。実年代では15世紀中葉～16世紀前半の時期が想定されている。

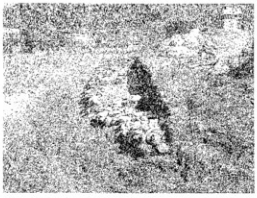


写真8　土留め状石積み（2）

基壇状石積み　北側に張り出す弱い円弧を描き東西に伸びる石積みで，東端と西端で角を成して屈曲する。東西幅は約9.5mを測る。土留め状石積みを除去したのちに，その下層で検出した石積みであり，地山面と考えられる7層を階段状に削り出した平坦面に石段状に石材を積上げている。用いている石材は大振りな川原石を主体としており，部分的に安山岩の板石を併用している。残存状況の良い箇所では3～4石を石垣状に積上げており，入念な施工が確認できる。石積みの前面には灰黄褐粘土（第27図第1層）が斜面の傾斜に沿って堆積している。後世の盛土の可能性も考えられるが，石積みに接して堆積しており，締まりが強いことから，石積みの前面に押さえの置き土として施工された層である可能性も考えられる。この1層中より，第28図41・43・46の遺物が出土した。41は土釜である。器厚の厚い口縁部に，短小な鍔部が水平方向に貼り付けられる。46は円筒埴輪片である。底部片であると考えている。底部には自重による歪みが確認できるが，ケズリなどでの最終調整は認められない。外面はタテハケである。43は須恵器高坏の脚部である。透孔の底辺が確認できる。端部は上下方向に肥厚する。埴輪片・須恵器片の存在が注視されるが，同一層中に土師器土釜が含まれることから，1層の形成は中世まで降ることが明らかである。41は口縁端部のみの資料であり，詳細な時期比定は困難であるが，口縁部が厚く短い点と，口縁部と鍔部の長さ比から，足釜BⅣ類（佐藤1995）に相当するものと考えられ，佐藤編年の第Ⅱ期第3段階に比定される。実年代では第Ⅱ期は14世紀前葉～15世紀前葉に相当するとされる。

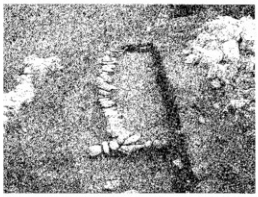


写真9　基壇状石積み

小結　本調査区では，構築の先後関係が明確な2種類の石積みを検出することができた。堆積状況と出土遺物から遺構の形成順序を整理すると，まず地山を削り出して基壇状の石積みが形成される。石積みは調査によって解体せず，現地に残しているため，遺構からの出土遺物を現状で確認できていないが，石垣前面の押さえの土であると考えられる1層から出土した土師器から，14世紀前葉～15世

紀前葉の時期が想定できる。

また，この層からは中世の土師器片と併せて円筒埴輪片と須恵器片が出土している。円筒埴輪は突帯の形状等が近在の相作牛塚古墳で出土した資料と類似しており，相作馬塚本体も含めて，近在に古墳が存在したことが推測される。また，2・3トレンチで検出した長辺約1.2mを測る大型の石材は，古墳の石室等の石材である可能性も考えられる。ただし，今回の調査で明確な古墳の痕跡は確認できておらず，今後の課題である。

基壇状石積みの次に形成されたのは，土留め状石積みである。基壇状石積みを被覆するように形成されており，墓壇状石積みよりも西に広く展開する。塚の西端に設定した5トレンチの状況から，近世以降大規模に盛土が足された状況を確認しており，塚の拡張が認められる。

基壇状石積みと，4トレンチで検出したST01の時期差については今後の課題であるが，基壇状の石積みは中世段階の墓域の区画に伴う遺構である可能性が考えられる。また，土留め状石積みについても，近世の五輪塔が多数出土していることから，近世の墓域造成に伴う遺構である可能性が高い。これらのことから，長期間に渡って墓域の造営が行われたと考えられる。(高上)

6　調査成果のまとめ

以上，塚頂部における調査成果と塚裾部における調査成果の概要を示した。ここで本遺跡における遺構変遷過程を整理する。まず14世紀前葉に塚頂部においてテラス面の形成が行われ，塚高まり部北側のテラス面上にST01が形成された。傾斜面への貼石もこの段階に行われた可能性が高い。墓壇状石積みの形成時期は，既述の通り，ST01よりも新しい可能性が高いが，遺構に伴うことが確実な遺物を確認していないため，評価は保留しておきたい。

その後，15世紀中葉～16世紀前葉には，人為的な盛土と積石を伴う墓域の拡大・区画が行われ，塚西端では大規模な盛土を伴う拡張が行われている。2・3トレンチや6トレンチでは近世の石造物石材が数基分出土していることから，少なくとも近世までは墓域として利用され続けたと考えられる。その後，近代に至り再度盛土が行われている。

一方で，円筒埴輪片や須恵器片等古墳の存在を示唆する遺物も多数出土している。いずれも川西編年Ⅴ期に属する遺物であり，隣接する相作牛塚古墳出土遺物同様，MT15並行期に属するものであるとみられる。古墳時代後期の古墳を改変して，14世紀前葉以降に再度墓域として利用された可能性も否定できない。

今回の調査では，中世に墓域が形成され，以降近代に至るまでの墓域の造成・区画・拡大に関わる改変の履歴を確認することができた。また，古墳に関わる遺物も出土していることから，墓域としての土地利用が古墳時代にまでさかのぼる可能性も指摘できる。(池見)

写真10　相作馬塚出土石造物

【参考文献】

- 佐藤竜馬1995「楠井産土器の編年」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告 第18冊　国分寺楠井遺跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センター
- 川西宏幸1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌 第64巻 第2号』日本考古学協会
- 松田朝由2009「鎌倉時代後期における天霧石石造物の展開」『四国中世史研究 第10号-10号記念号-』四国中世史研究会

御殿貯水池南遺跡（ごてんちょすいちみなみいせき）

1　所　在　地　高松市鶴市町
2　調 査 期 間　平成23年６月20日
3　調査担当者　高上　拓
4　調査の原因　都市計画道路木太鬼無線建設
5　調査の概要

調査対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地「御殿貯水池南遺跡」に隣接することから，事業者の了解を得て試掘調査を実施した。

試掘トレンチ中央から東側にかけて，谷状地形に堆積する暗褐色粘土を検出し，それを基盤層とした溝跡を確認した。位置関係から，平成20年度に発掘調査で確認した溝跡と一連の遺構である可能性が高く，遺物は検出できなかったが，弥生時代後期の溝跡の可能性が考えられる。

6　まとめ

周知の埋蔵文化財包蔵地として認められたため，開発事業に先立ち，平成23年度から発掘調査を実施している。

第30図　御殿貯水池南遺跡調査地位置図

塚（つか）

1　所　在　地　高松市鶴市町
2　調 査 期 間　平成23年６月21日
3　調査担当者　高上　拓
4　調査の原因　農地整備工事
5　調査の概要

調査地は周知の埋蔵文化財包蔵地「塚」であり，小山状の地形を呈していた。ただし，時期や構造などについて明らかでなかったため，地権者の依頼を受け，遺跡の内容および範囲確認のために試掘調査を実施した。

塚は現況で直径１ｍ程度のいびつな円形を呈しており，径５～30cm大の石材を無造作に集積した状態であった。調査にあたり，現況の平面図を作成し，座標に沿った主軸上で南北に半裁し，断面観察を行った。その結果，中世の足釜片や近世の陶磁器片に混ざって，ビニール片などが混入している状況が確認できた。また，石材を地山上に盛り上げただけの構造で，地下に掘り込みなどは認められなかった。以上の結果から，塚は現代に至って形成されたか，または大規模に改変されて旧状をほとんど保っていないと考えられる。

第31図　調査地位置図

6　まとめ

調査地は周知の埋蔵文化財包蔵地内とは認められない。

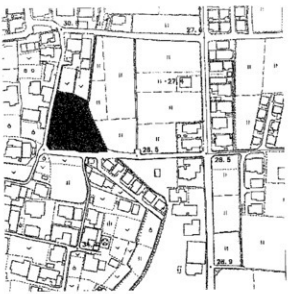
新名氏屋敷跡（しんみょうじやしきあと）

1　所在地　高松市国分寺町新名
2　調査期間　平成23年７月５日
3　調査担当者　小川　賢・中西克也
4　調査の原因　宅地造成
5　調査の概要

調査地は周知の文化財包蔵地である新名氏屋敷跡の一角に比定される。平成23年６月23日付けで確認調査依頼を受けたことから，７月５日付けで文化財保護法第99条に基づき，工事の影響が及ぶ範囲について埋蔵文化財の有無を確認するために調査を実施した。トレンチを設定し調査を実施した結果，平安時代の遺構・遺物を包蔵することが確認できた。

6　まとめ

上記の結果から，埋蔵文化財包蔵地に該当する範囲において埋蔵文化財が存在することが判明し，事前の保護措置が必要であったため，平成23年度に工事立会で対応を行った。



第32図　調査地位置図

出作町東原地区（しゅっさくちょうひがしはらちく）

1　所在地　高松市出作町
2　調査期間　平成23年７月27日
3　調査担当者　山元敏裕
4　調査の原因　龍雲中学校校舎改築工事
5　調査の概要

調査対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地ではないが，周知の埋蔵文化財包蔵地である旧南海道跡に隣接していることから，校舎改築工事に先立ち試掘調査を実施した。

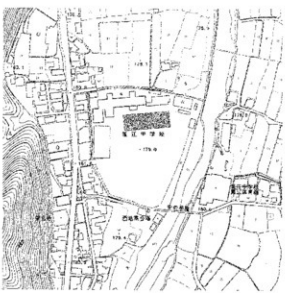
試掘調査では，東西方向に２本のトレンチを設定し掘削を行った。その結果，地表面下0.5～0.6mまでは学校建設に伴う造成土，以下旧耕作土，床土を確認した。調査対象範囲東端付近と西端付近ではその下位で，ベースと考えられる黒褐色砂礫あるいは粗砂を確認し，上面で近世以降と考えられる土坑を２基確認した。また，調査対象範囲中央付近では旧耕作土等の下位で水田土壌層と考えられる堆積層を確認したが，畦畔状の高まりは確認できなかった。

第33図　調査地位置図

調査結果の状況から，調査対象範囲については中央部に凹地が存在し，その両側に微高地が存在することが判明した。しかしながら，明確な遺構は存在せず，埋蔵文化財包蔵地とは認められない。以上の結果から，事前の保護措置は必要ないものと考えられる。

西地遺跡（にしじいせき）

1　調　査　地　高松市塩江町安原上
2　調査期間　平成23年７月25～26日
3　調査担当者　山元敏裕
4　調査の原因　塩江地区小・中学校建設
5　調査の概要



第34図　西地遺跡調査位置図

調査対象地周辺には，これまで周知の埋蔵文化財包蔵地は確認されていないが，事業面積が広大であることから，試掘調査を実施することとなった。実施にあたっては，既存施設を避け，事業予定地東側に南北方向の第１トレンチ，東側から中央部にかけて東西方向の第２トレンチを設定し，試掘調査を実施した。その結果，第１トレンチおよび第２トレンチ東端から西へ10mの範囲（①②）について，地表面から50cmまでは花崗土の盛土，それから２m下までは砂礫・砂を中心とする堆積層が認められ，トレンチ北端の最下層から近世以降と考えられる磁器の碗が出土したことから，新しい時期まで調査地東側を流れる香東川の氾濫原であったことが判明した。第２トレンチ東半部（③④）は現地表面下約１mまでは花崗土による盛土で，その下に水田耕作土・さらに砂の堆積を確認し，グランド造成前は水田，それ以前は第１トレンチと同様に氾濫原であったことが判明した。第２トレンチ西半部（⑤⑥）では状況が異なり，地表面から30cmでにぶい黄褐色シルト質細砂を遺構面とする溝，柱穴，不定形遺構を確認した。第２トレンチ西端付近（⑦）では，地表面から20cmまでは花崗土の盛土，その下には灰黄褐色砂礫が認められた。この層はトレンチ西端から東へ８mで，遺構面であるにぶい黄褐色シルト質細砂の下へ続いている状況を確認したことから，本来の西側から続く傾斜した旧地形は学校建設時の造成で削られた可能性が高いと考えられる。

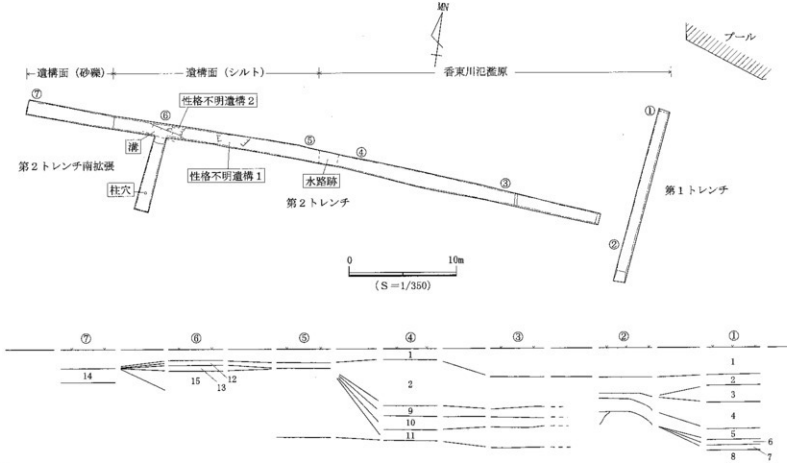
第２トレンチ西半部で確認した遺構の一部掘り下げを実施し，遺構の時期の特定に努めたが，出土した遺物が細片で細かな時期は特定できないが，中世頃の遺構であると考えられる。

6　まとめ

今回の試掘調査では，第２トレンチ西半部で遺構を確認したことから，事業実施にあたっては，事前の保護措置が必要である。

写真11　第１トレンチ完掘状況（南から）

写真12　第２トレンチ完掘状況（東から）



層序

1 盛土（花崗土）
2 盛土（その他）
3 灰色礫混じりシルト（N4/）
場所により黄灰色礫混じりシルト，
にぶい黄褐色砂礫になる部分あり
4 灰黄褐色砂礫（10YR5/2）
褐灰色砂礫（10YR5/1）が混じる部分あり
5 にぶい黄褐色砂礫（10YR5/4）
6 褐灰色シルト質細砂（10YR5/1）
7 灰黄褐色砂礫（10YR6/2）
8 にぶい黄橙色粗砂（10YR6/4）
9 褐灰色シルト（10YR4/1）旧耕作土
10 灰黄褐色シルト質細砂（10YR5/2）
11 灰黄褐色シルト質砂礫（10YR5/2）
12 褐灰色礫混じりシルト（10YR4/1）
13 にぶい黄橙色礫混じりシルト（10YR6/3）
14 灰黄褐色砂礫（10YR5/2）ベース
15 にぶい黄橙色シルト質細砂（10YR6/4）

第35図　トレンチ平面図・柱状図

上林町本村地区（かみはやしちょうほんむらちく）

1　所在地　高松市上林町
2　調査期間　平成23年８月４日
3　調査担当者　波多野 篤
4　調査の原因　分譲住宅建設
5　調査の概要

事業予定地内に合計３本の南北トレンチを設定して遺構・遺物の有無を確認した。当地では，現状地盤から約0.8～1.0m下で河川堆積を起源とする自然堆積層を確認し，その上面で遺構・遺物の有無を確認した。しかし，いずれのトレンチでも遺構・遺物ともに認められなかった。

6　まとめ

以上の結果から，埋蔵文化財包蔵地ではないと判断し，事前の保護措置は不要と判断した。

第36図　調査地位置図

木太町本村地区（きたちょうほんむらちく）

1　所在地　高松市木太町
2　調査期間　平成23年８月５日
3　調査担当者　山元敏裕
4　調査の原因　木太南放課後児童クラブ新築工事
5　調査の概要

調査対象地は，周知の埋蔵文化財包蔵地ではないが，周知の埋蔵文化財包蔵地である「神内城跡」「木太中村遺跡」に隣接しており，関連する遺構の確認が想定されたため，事業実施前に試掘調査を実施した。

試掘調査では，調査対象範囲内に東西に延びる１本のトレンチを設定し掘削を行った。その結果，現地表から1.1mは小学校造成時の盛土，以下旧耕作土，床土を確認した。さらにその下位では遺構面と考えられるにぶい黄色シルトを確認し，この上面および土層断面で遺構確認のための精査を行ったが，遺構は認められなかった。

第37図　調査地位置図

周辺部の状況から遺構の確認が想定されたが，試掘調査の結果，遺跡は確認されなかったことから，今回の事業範囲については，事前の保護措置の必要はないものと判断した。

日暮（ひぐらし）・松林遺跡（まつばやしいせき）

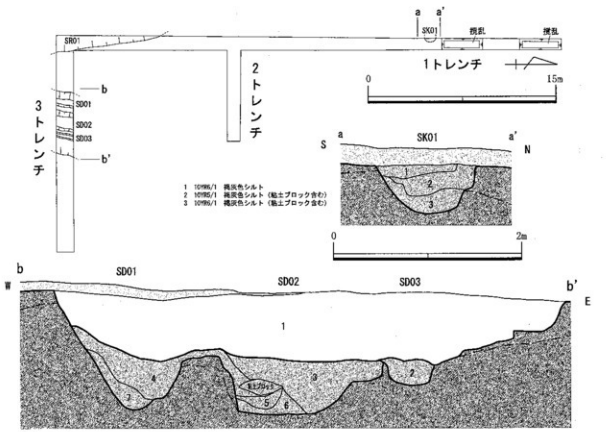
1　所　在　地　高松市多肥上町
2　調査期間　平成23年９月22日
3　調査担当者　波多野篤
4　調査の原因　福祉施設（老人ホーム）
　　建設工事
5　調査の概要

多肥上町で計画された福祉施設建設予定地は，日暮・松林遺跡の隣接地にあたるため，事業者の任意の協力により試掘調査を実施した。試掘調査は，事業予定地内に合計３本のトレンチを設定して調査した。遺構面までの深さは10～20cmで，土坑を１基，自然流路を１条，溝を３条検出した。このうち，SD01～03の幅は0.5～1.7mで洪水砂により埋没しており，洪水砂から弥生土器片が数点出土した。

第38図　調査地位置図

6　まとめ

今回の試掘調査でおもに弥生時代の遺構を検出した。当地は日暮・松林遺跡と同じ微高地上に立地することから，検出した遺構は日暮・松林遺跡に関わる遺構と推定できる。この成果から事業予定地は新規の埋蔵文化財包蔵地に登録されたため，事業者と協議した結果，保護層を確保する措置が図られた。



第39図　平面図・断面図（１／300・１／40）

特別史跡讃岐国分寺跡
～第41次調査～

1　所　在　地　高松市国分寺町国分
2　調 査 期 間　平成23年11月９～10日
3　調査担当者　渡邊　誠
4　調査の原因　住宅新築
5　調査の概要
a　これまでの経緯と調査目的

今回の調査は，史跡地内における住宅新築に伴う事前の確認調査である。調査地は寺域西側に位置しており，現状変更の可否の検討および協議を行うための基礎資料を得ることを目的に実施した。

第40図 調査地位置図

b　調査成果

基本層序は上層から①花崗土，②耕作土，③床土，④褐灰色粘土，⑤灰黄褐色砂混じり粘土，⑥褐灰色礫混じり砂およびシルト，⑦明黄褐色粘土と灰白色粘土（地山）である。基本層序はいずれのトレンチも同様であるが，地形が北から南に大きく傾斜する場所で，南側に位置する第２トレンチは層序が増加する。

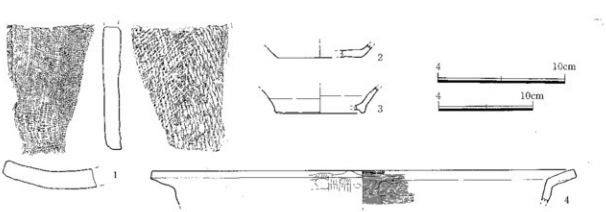
①遺構／遺物

第１トレンチの遺構面は１面で，溝，柱穴列などを確認し，いずれも地山面から遺構が掘り込まれている。一部遺構の掘削を行ったが，明確な時期を示す遺物は出土しなかった。溝から出土した瓦等から，古代以降の所産と考えられる。トレンチ南側では湧水が認められた。

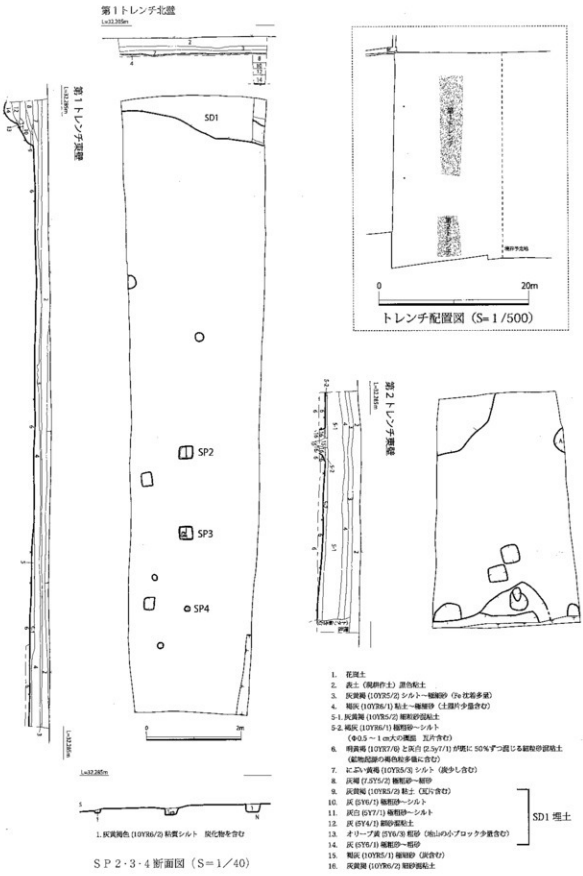
第２トレンチは柱穴等の遺構を確認したが，第１トレンチよりも地形が低くなり，湧水が著しく，個別遺構の調査が実施できる状態ではなかった。第１トレンチ同様に遺構遺物ともに希薄であり，第38次調査と同様に近世以降のものである可能性が想定される。最南部は既存の擁壁工事に伴う大規模な撹乱が存在していることが明らかになった。

6　まとめ

調査の結果，いずれのトレンチにおいても古代讃岐国分寺跡に関連する遺構は確認できず，遺構遺物ともに希薄であった。このような状況から当調査地西側に位置する第38次調査地と同様で，野間川に近接することから河川の氾濫等の自然環境の影響を受けやすい範囲であったと考えられる。



第41図　出土遺物実測図



第42図　第1・2トレンチ平面図・土層図（S＝1／80）

史跡天然記念物屋島－屋嶋城跡浦生地区－

１　調　査　地　高松市屋島西町
　　（浦生地区）
２　調査期間　平成22年10月12日～
　　平成23年２月24日
３　調査担当者　小川　賢
４　調査の概要

調査地は屋島を南嶺と北嶺に分ける大谷の奥，標高100ｍ付近に位置する。当地にある石塁の調査報告は大正時代に遡り，昭和９年に史跡天然記念物に指定される際に「日本書紀」に記された屋嶋城の遺構として評価された。確認調査は昭和55年度に市教委が実施しており，約100ｍにわたり谷を遮断する状況が明確になったが，出土遺物などにより，時期に疑問が生じることとなった。その後，山上での確認調査により城門跡が検出され，古代山城の評価が確定したものの，浦生の石塁については築造時期を主とした資料蓄積の必要性から，平成21年度より確認調査を実施している。

第43図　調査地位置図（１／40,000）

本年度の調査では，城壁構造を把握することを目的としたもので，21年度のトレンチを西側に伸ばし，城壁を横断する位置にトレンチを設定した。

現況の城壁は夾築になっておりその内壁に石垣が認められるが，外法面および天端については，石を築く箇所は認められず土を基調とした表層となっている。石垣をもつ内壁の角度は約75°，壁面の崩落が考えられる外法面の角度は40°前後，天端の西端から約4.5ｍの地点でさらに緩斜面となり，この裾部で24°前後を測る。掘削の結果，内壁内部の夾築部分は水平堆積を呈する土石により構築されていることが明らかとなった。土質はシルト質土，砂礫，粘質土が認められ，下方につれ安山岩が目立つようになり，平面的には３面において集石状になるのが観察できた。

外法面の掘削においては，城壁外壁の遺存状況は明確にならなかった。堆積状況については，天端肩部で変化し水平堆積が見られなくなり，表土および流土の下に石を基調とする土石の堆積を確認したが，石垣状に築かれたものは確認できなかった。また現況の裾部に相当する傾斜の変換地点では大振りの安山岩が多数認められるが，外壁の基底に相当しうるものではない。掘削による出土遺物ついては，外法面の流土層から中世土器が少量あったのみである。

５　まとめ

調査により，少なくとも城壁部は土石の構築であり，構造的に石塁と言い難くなった。現在，遺構の総称として「浦生石塁」を用いているが，その由来は不明である。本来的には，この遺構により屋嶋城跡として国指定史跡を受けた経緯をもつことから，名称には屋嶋城跡を用いるのが妥当であり，今後は山上遺構と区別するため浦生地区を付け加え，「屋嶋城跡浦生地区」の名称とする。

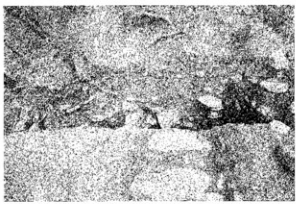
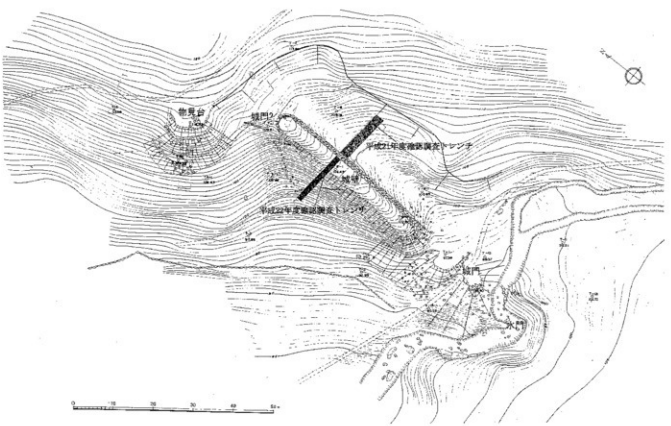
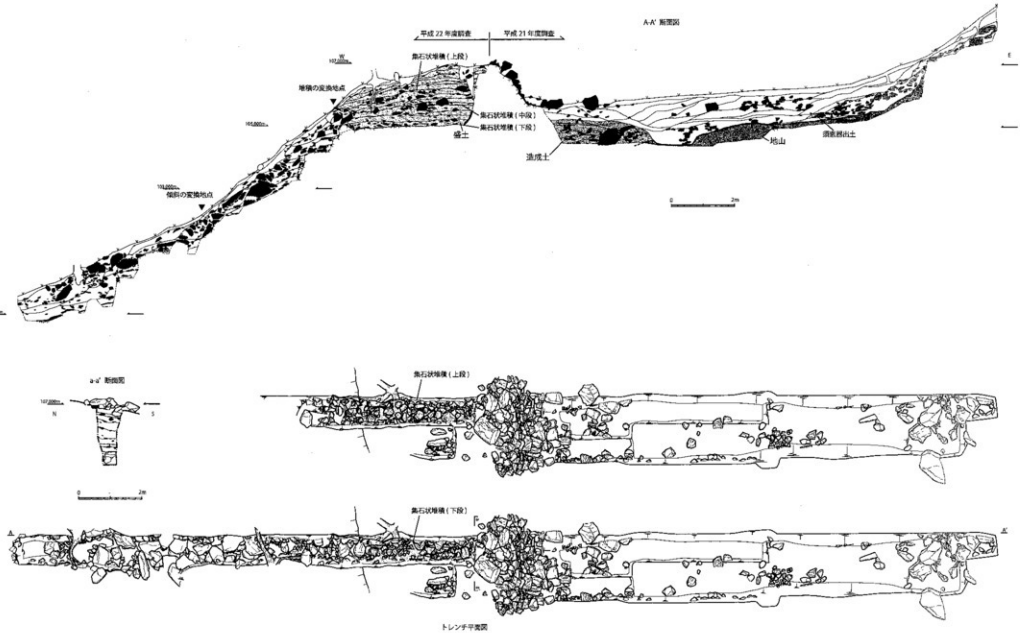


写真13　城壁天端堆積状況（南方向から）

写真14　外法面トレンチ掘削状況（西方向から）



第44図　トレンチ平面配置図



第45図　トレンチ平・断面図（1／120）

報告書抄録

ふりがな	たかまつしないいせきはっくつちょうさがいほう
書　名	高松市内遺跡発掘調査概報
副書名	平成23年度高松市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第141集
編著者名	山元敏裕・小川賢・渡邊誠・高上拓・渡多野篤・船築紀子・池見渉
編集機関	高松市教育委員会
所在地	〒760-8571　香川県高松市番町一丁目8番15号　Tm. 087(839)2660
発行年月日	平成24年3月31日

所収調査	調査地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
特別史跡讃岐国分寺跡－第40次調査－	国分寺町国分	37201		34°18′09″	133°56′42″	H23.1.11 ～1.14	5.1㎡	下水管敷設
神内城跡	西植田町	37201		34°13′40″	134°04′25″	H23.2.1～3.31	900.0㎡	確認調査
紙岡山古墳－第6・7次調査－	香川町大野・浅野	37201		34°14′58″	134°01′53″	H23.2.21 ～3.4(6次) H23.8.15 ～8.26(7次)	9.0㎡	確認調査
香川町浅野地区	香川町浅野(浅野浄水場内)	37201		34°15′13″	134°01′47″	H23.3.17	15.0㎡	管理棟新築
佐料遺跡	鬼無町	37201		34°20′01″	133°59′44″	H23.3.22 ～3.23	146.0㎡	福祉施設建設
国分寺町新居地区	国分寺町新居	37201		34°17′49″	133°57′35″	H23.3.28 ～3.29	78.0㎡	高松西部地域文化施設(周辺道路)整備
史跡讃岐国分尼寺跡－第11次調査－	国分寺町新居	37201		34°18′38″	133°57′46″	H23.5.9～6.9	110.0㎡	確認調査
多肥上町宮尻地区	多肥上町	37201		34°17′38″	134°03′30″	H23.5.9	60.0㎡	集合住宅建設
柑作男塚	鶴市町	37201		34°19′26″	134°00′21″	H23.5.25 ～6.23 H23.9.26 ～10.7	80.0㎡	農地整備
通り谷遺跡	三谷町	37201		34°15′42″	134°04′41″	H23.6.6～11.1	30.0㎡	墓園区画造成
御殿貯水池堰堤跡	鶴市町	37201		34°19′43″	134°01′08″	H23.6.20	20.0㎡	都市計画道路木太鬼無線整備
塚	鶴市町	37201		34°19′26″	134°00′20″	H23.6.21	1.0㎡	農地整備
新名氏屋敷跡	国分寺町新名	37201		34°17′13″	133°57′28″	H23.7.5	14.0㎡	宅地造成
西地遺跡	塩江町安原上	37201		34°10′54″	134°04′26″	H23.7.25 ～7.26	77.5㎡	塩江小・中学校校舎建設
出作町東原地区	出作町	37201		34°16′57″	134°03′02″	H23.7.27	21.0㎡	龍雲中学校校舎改築

上林町本村地区	上林町	37201		34°17′27″	134°03′55″	H23. 8. 4	16. 8 ㎡	分譲住宅建設
木太町本村地区	木太町	37201		34°19′15″	134°04′27″	H23. 8. 5	8. 0 ㎡	木太南放課後児童クラブ新築
日暮・松林遺跡	国分寺町国分	37201		34°17′40″	134°03′32″	H23. 8. 22	70. 0 ㎡	福祉施設（老人ホーム）増設
特別史跡讃岐国分寺跡―第41次調査―	国分寺町国分	37201		34°18′08″	133°56′34″	H23. 11. 10	51. 0 ㎡	住宅新築
史跡天然記念物屋島（埋生地区）	屋島西町（埋生地区）	37201		34°21′42″	134°06′07″	H22. 10. 12 ～H23. 2. 24	15. 0 ㎡	内容確認

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
特別史跡讃岐国分寺跡―第40次調査―	寺院	古代～近世	柱穴，雨落ち溝，瓦溜まり	瓦，陶磁器	
神内城跡	城館	中世	土塁	―	
船岡山古墳―第6・7次調査―	古墳	古墳	東側くびれ部	円筒埴輪	
佐料遺跡	集落	弥生，古墳	柱穴，溝，溝路，性格不明遺構	弥生土器，土師器，石器	
史跡讃岐国分尼寺跡―第11次調査―	寺院	古代	柱穴，礎石，礎石抜き取り痕，雨落ち溝	瓦，土師器，須恵器，石器	
相作馬塚	その他の墓	中世～近世	貼石状遺構，テラス面，集石墓，土留め状石積み，基壇状石積み	土師器，須恵器，陶磁器，石造物，円筒埴輪等	
御厩跡竹水池南遺跡	集落	弥生	溝	―	
新名氏屋敷跡	城館	平安，中世	柱穴，土坑，溝	土師器，須恵器等	
西浦遺跡	集落跡	平安，中世	柱穴，溝，性格不明遺構	土師器，陶器	
日暮・松林遺跡	集落	弥生	土坑，溝，溝路	弥生土器	
特別史跡讃岐国分寺跡―第41次調査―	寺院	古代～近世	柱穴，溝	瓦，陶磁器	
史跡天然記念物屋島	城館	古代，中世	城郭	中世土器	

高松市内遺跡発掘調査概報

―平成23年度国庫補助事業―

平成24年３月31日発行

編集・発行　高松市教育委員会
　　高松市番町一丁目８番15号

印刷　株式会社 万成社